
ガンダム大戦VRMMO 『無限の戦場』

AITRUST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダム大戦VRMMO『無限の戦場』

【Nコード】

N4611X

【作者名】

A I T R U S T

【あらすじ】

古くから愛され続けてきたガンダム。その発展は留まることを知らず。ひとえに愛から技術者達はそのゲームを開発した。何十年にも及ぶ長い歴史と数多いファンの愛を詰め込んだそのゲームは、かつて『戦場の絆』と呼ばれた体感型アミューズメントゲームと、アーケードゲーム『ガンダムVS』シリーズの後を引き継いだ。究極の自由度を求めたまさに愛の結晶。その名も『無限の戦場』である。

プロローグ『宇宙』（前書き）

最初に警告しておきます。

この小説はその特性上『ボク、ワタシの考えた最強機体』的内容になります。

原作はガンダムとしてありますが、舞台は現実ベースの近未来です。原作とは無関係です。

詳しい説明は一話に予定しております。

それでもおkと言う方はどうぞお進みください。

おk? Y e s N o

プロローグ『宇宙』

視界。

コックピットのモニターには明るい宇宙そふが広がっている。

実際、色と言えは黒ばかりなのに輝く星々が暗さなど微塵も感じさせない。

漂うデブリを避けつつ先を急ぐ。既に戦火は切って落とされ、少し離れた場所ではビームと爆発の光が見える。

今日もまた戦う。

昨日も戦った。

明日も……戦うだろう。

愛機と共に戦場を駆る。戦友と共に仮想世界の宇宙そふを飛び交うのだ。

少なくともここにいる間は現実の様々な呪縛から解き放たれる。重力がその最たるものだ。

この世界はどこまでも自由なのだから。
仮想宇宙

第1話『無限の戦場』（前書き）

説明話です。

未だ主人公の詳細も決まっていないうプロットも経てておりません。

第1話『無限の戦場』

ガンダム戦争VRMMO『無限の戦場』はVRヴァーチャル・リアリティを搭載したゲームハードが一般に普及し初めてから数年後に発表された。

憧れのMSモビルスーツを操縦し、仮想の大地を、そして宇宙空間を飛び交い戦う。

ファンにとっては長年の夢が叶うと言うことで、当時は相当なお祭り騒ぎになったそう。その頃まだ小さかった俺はあまり覚えていない。

最初は初代ガンダムの機体が登場し、基本的に昔と変わらない2ON2での戦いが基本だったそう。それでも仮想空間で実際に機体のコックピットに乗ると言う感覚は人々を魅了した。

それから徐々にアップデートを重ね、機体数を増やしたり4ON4やそれ以上のまさに戦争をしているような大規模戦闘ができるようにしたりとファンを唸らせた。

しかし原作の世界観をそのまま使うのは難しかった。様々な世界があるのでそれをひとつに纏めるのはどう頑張っても納得の行くこととは無かったらしい。

だからこの仮想世界は独自の世界観を持っている。

公式には存在する区分は2つ。地球連邦と宇宙連邦だ。

その2つに大きな差は無い。ゲーム開始時に好きに選択できる。違いは敵対する相手が違うくらいだ。

受けられるミッションが違い、CPUが操る機体が違う。ミッションの内容が『ガンタンクを落とせ』か『ザクを落とせ』かが違う

くらいで、難易度は揃えられている。

また、一方の連合に人数が集まりすぎると劣勢側に強力な助っ人が現れたりするので両者のバランスが崩れないようにしている。

後、地球連邦と宇宙連邦は共に地上3箇所、宇宙3箇所ずつ拠点を持っていて、月や南国は中立の観光地になっていたりする。

そのどちらにも属さない場合もあるが、少数なので例外であると言われておく。

2つの連邦の中にも細かく区分しされるのだが、それはまた今度にしよう。

このゲームが大人気となった理由は間違いなくその自由度の高さだ。

ベテランとまではいかないが俺も1年近いキャリアがあるのだが、未だにそんなことも出来るのか！ と驚く機会も多い。

ただし、その自由度の高さは尋常ではなく、ゲームの難易度を引き上げていた。

あまりの難しさに新規加入者は増えにくい。そんな状況を打破する秘策は体験版だった。

体験版ではMSの操縦初級訓練を受けることができる。これ自体は簡単にクリアできる。

初期設定の操縦でも訓練用のCPUは簡単に倒すことができる。そしてこれはゲーム序盤で受けることができるチャレンジでも同じだし中級まではなんとかなる。初心者同士なら対人戦しても十分楽しめる。

そう、楽しめてしまう。

あるものはコックピットのモニター越しに見る壮大な風景に魅せられ、あるものは戦いの中に意義を感じ、あるものはロボットの浪漫に引き込まれる。

俺の場合は風景、特に視界一杯に広がる満点の宇宙と無重力にかつてないほどの自由さを見た。

そして、初心者を抜け出した初級者は早くも自由度と言う壁にぶち当たる。

その1、機体のカスタマイズが自由であること。ただし、自由度の名のもとに細かく精密に作られたMSを改造するのは簡単ではない。

その2、機体を改造したらその装備にあつたコックピットを作らなければいけない。極端に言えば3つの武装を1つのボタンで動かすことはできないからだ。

その3、これが最も大事で最も難しい。初期OSではいつまで経っても初級者から上にはいけない。

俺はこの3つの壁を単独で越えることができる人間がいたなら、それはそれは天才か化け物か、もしくはニュータイププロコーディネーターorイノバイターのどれかだろうと思う。

第1話『無限の戦場』（後書き）

自分には原作知識が不足しています。

大体分かるのが種、運命、OO、後はかろうじてW位。
代表的な物の大まかな内容くらいしか知らないです。

それゆえ、指摘またはアドバイスなどをもらえると大変嬉しいです。

自分一人で考えると偏りそうな登場キャラ、機体等のアイデアなども募集します。（実際に出るかは不明）

それではこれからよろしくお願ひします。

第2話『古き相棒』（前書き）

場繋ぎです。

まだ主人公の名前とかも決まってません。

第2話『古き相棒』

狙いすましたビームライフルの一撃が敵の機体を貫通し撃破した。青い空の下、爆炎が赤い光を放つ。これで残ったフラッグは1機となった。

未だこちらの損傷はない。

と言うのも、これが新規アップデートされた『OO』の開幕任務オープニング・ミッションで、原作通りフラッグの動きはひどく緩慢で、その難易度は初心者レベルだ。

期間限定で一回しか行えない特殊任務エクストラ・ミッションで難易度に似合わない多めの報酬が無ければ挑戦する気にはならなかっただろう。

真正面から重たい動作で突っ込んで来るフラッグを余裕をもって躲し、すれ違いざまにビームサーベルを一閃。

スッパリと切り落とされた右腕を尻目に振り向きざまにもう一閃。今度は左腕の肘付近が両断された。ダメ押しに頭部を一突きしてパイロットを殺すことなく無力化する。

これでこのミッションは終了だ。

単機ボーナスに無傷ボーナスや不殺ボーナスなど、極端に難易度の低い任務だから可能な様々なボーナスが加点され、そこそこの報酬と貢献度を稼がせて貰った。

今回の特殊任務は仲間から資金を前借りさせてもらっている俺にはまさに渡りに船となった。これでなんとか返す目処がたった。

任務を終え、ハンガーエリアに戻ってきた俺は、約4カ月の付き合いになる愛機を見上げた。

『GAT-X105 ストライク』

様々な改良、改修を受け純粋なストライクではないが、実に健気に頑張ってくれた機体だ。

最初は友人が新機体へ乗り換える際に譲り受けたお下がりイメージが強かったが、今では数々の戦場を共にくぐり抜けてきた相棒だ。

普通なら新機体の資金繰りに困るため、古いものは手放される。しかし、こいつ自体友人から受け継いだものだし愛着もある。癖も少なくかなりの汎用性もあるので、予備機体。もしくは後輩に乗り継がれていくことが小隊で決定した。

色を失っているPS装甲はメタリックグレーで、薄暗い格納庫でいくつかのライトを受けながら静かに佇んでいる。

今までありがとうな。

恥ずかしいセリフなので口には出さず、そつと心の中で呟く。無言で敬礼をしてこれまでよく戦ってくれた相棒に背を向けた。

第2話『古き相棒』（後書き）

概要は浮かんできましたが細かい設定はまだ曖昧なままです。

随時、様々なアイデアを募集しています。

登場キャラ、MS、小隊、中隊、艦隊（他ゲームのギルド的なもの）等々。

もちろん感想もお待ちしております。

第3話『天才襲来』（前書き）

やっぱり具体的なプロットは立てずに進行。
変な部分も出てくると思いますが、どうかご容赦を。

第3話 『天才襲来』

思いつきり背伸びをして授業で凝り固まった背筋を伸ばす。骨が
いい音を慣らし、収縮した筋肉が解される。ようやく学校が終わっ
た。

今日は早く帰って『無限の戦場』にログインしたい。今日でよう
やく新型機がロールアウトするのだ。待ちに待った対面を控え、今
日の授業はどこか上の空だったかもしれない。

俺はさっさと帰り支度を済ませ帰宅しようとした。しかし、そん
な俺を引き止めた者がいた。

「待つて、美空悠人君」

声をかけてきたのは女子で、普段なら舞い上がって喜んだかもし
れないが、今日の俺は既に舞い上がっている。それに愛すべき新型
機に早く会いたいと言う心情から、若干不機嫌になりつつ、帰宅を
邪魔しようとする不屈きものに向き直った。

そして、その姿を確認したとき舞い上がっていたことまで吹き飛
ばす勢いで驚いた。その不屈きものがある『姫乃愛沙』だったから
だ。

しかも彼女が次に発した言葉は俺を驚きから困惑に引きずり込ん
だ。

「あなたは地球連邦？ それとも宇宙連邦？」

二つ名。

リアル
現実では滅多にお目にかかれないものだ。

中二病患者やナルシストは例外とする。あれはそんな大層なものではない。のちのち痛い過去に変わるだけのものだ。

しかし、姫乃愛沙には二つ名が存在する。

学校の中限定ではあるものの通称『天才の姫様』。その名の通り天才で、めちやくちや美人だ。狭い学校の中で有名にならない方がおかしい。

どれくらいすごいのかと言うとテストは毎回学年トップ。得意の理数系なら100点も珍しくない。全国模試でも相当上位に食い込むらしい。噂では先輩達どころか、一部の評判の悪い先生より頭が良いとか囁かれている。

顔の作りは非の打ち所がないと言っても過言では無いし、黒い艶髪はサラサラと長く、粒子を振りまいているのではないかというほど綺麗だ。

入学してから半年くらいの間は告白ラッシュみたいなものまであった。その全てを断り、普段から愛想1つ振りまかないので、大半の男子生徒は仲良くなるのを諦め遠くから眺めるのに務めている。まさに高嶺の花ってやつだ。

頭が良い、容姿が良い、運動だって十分できる。天は二物を与えないと言うのは嘘だと証明してしまっている。

俺と姫乃は普通に進級し（姫乃の場合、飛び級してもなんら不思議はない）高校2年生となり、同じクラスになって約3週間。

誰とも交流しようとしなかった姫乃愛沙が自分から俺に話しかけてきたのだ。

あの誰とも話さない姫様が目立たない男子に声をかけた。その驚くべき事態に、HR終了直後で人の大勢残っている教室が騒然となった。

あれは誰？ なぜ話しかけた？ どういう関係？

そう言った雰囲気^{プレッシャー}が直に俺への威圧感へと変換される。

「あー……。取り敢えず場所を変えよう」

俺の提案に姫乃は頷く。

見ると、既に帰り支度は整っているようなのでそのまま2人で教室を出る。とたんに教室が騒がしくなったので、意図的に気にしないようにして昇降口へ急いだ。

交わした言葉はお互い一言づつ。しかし、それで十分意図は通じている。

俺たちはお互いに『無限の戦場』をプレイしていることが理解できていた。

第3話『天才襲来』（後書き）

さて、しばらくは登場する予定が無いのでまだ決めていない姫乃愛沙さんのMSアイデアを募集します。

完全オリジナルでは無く、原作機体をうまく改造するのがポイントです。

例）ヘビーアームズ火力重視型（火力アップ・機動力ダウン）
ビーム兵器も積んでみたり？

第4話『スタバ会議』（前書き）

続々更新中。きつと今だけ。

第4話『スタバ会議』

「それで、なんで姫乃愛沙さんが一緒なんですか？」

最初に話を切り出したのは俺でも姫乃でもなく、アキハラ ススカ秋原鈴香。俺の幼馴染つてやつで、同じく高校2年。同じ高校に通っている。

簡単に表現するなら能天気な奴だ。

ザツクリと肩口で切りそろえたショートヘアと何時でも何処でも笑顔を絶やさないその性格は昔から変わらない。

教室から逃げるように学校から出てきた俺に行く当てなんて無く、軽く途方に暮れかけたときに、鈴香は俺の元へ颯爽と駆けつけた。

なんでも俺と姫乃が連れ立って教室を出た際の、何かワケありと言った雰囲気か噂を呼び、憶測が飛び交っているそう。隣のクラスの鈴香の元にもその情報は直ぐに届いたらしい。

そして、事の真相を探るべく俺を追いかけてきたのだと言う。

そんなわけで鈴香に先導されてスタバまで来た。しかも、堂々と場を仕切っていらっしやる。

しかも当然の如く俺の支払いである。立て替えてるだけだと信じたい。

姫乃の様子は困惑と言ったところか。いきなり鈴香のペースに巻き込まれた人は大体そんな顔をする。

「安心しろよ、鈴香はウチの小隊の優秀なメカニックだ。俺の上司だし」

能天気で一見バカっぽい鈴香はかなり頭が良い。理数系では姫

乃に並ぶほどで、その影響か機械弄りが趣味だ。だがやっぱりバカなのか、こころ一番でミスすることが多い。

「成程、納得がいった」

普通なら鈴香の意外性に驚く人が多いのだが姫乃は違った。しかも、そのことが顔に出ていたらしい。

「秋原さんの理数の成績がいいのは最初から知ってる。だから、美空君が半年くらい前から急にテストの点数が上がってきたのは秋原さんから『無限の戦場』を勧められて、理数系を真面目に勉強しようと思ったから教えて貰ったんでしょ？」

全部正解だった。

俺は去年のこの時期、鈴香の勧めで『無限の戦場』を始め、見事にハマった。

このゲームで上を目指すなら理数系の知識があるのとないのでは全然違う。それらが得意な鈴香に全て任せてしまっただけは、このゲームをやる意味がないと隊長も言っていた。

「すごいな。でもなんで俺の成績なんか知ってるんだ？」

「成績上位者は張り出されるじゃない」

それだけでよくわかるもんだ。

「ん、じゃあ。そのことが切欠で俺に話しかけたのか？」

「後、体育ね。あの重心の運びかたとかはMSに乗っている動き方」

胡散臭い。そう感じながらも、そう言えば球技で活躍できるようになった気がしなくもなかったか……。それよりも俺は姫乃から観察されてたんだな。全く気付かなかった。

「決め手は今日の授業中MSについて考えてると確信したからよ」

「なんでそれがわかるんだよ」

「勘よ」

「ニュータイプかお主は。」

「改めて。俺になんの用だ？」

ようやく本題。今までのやり取りで緊張するのも馬鹿らしくなった。天才だろうと、そうでなかつと同じこと、俺たちは同じガンダム馬鹿だ。

「だから、美空君は地球連邦なのか宇宙連邦なのか知りたいの」

「俺はその理由が知りたいんだ。疑いたい訳じゃ無いがVRMMOでリアルが割られるのはかなり危ない。個人情報自分で守るのが現代人のマナーだよ」

本当に疑うつもりはない。が、こういう事は曖昧にしておくのが一番危うい。明確にハッキリと線引きしておくことが大事なのだ。

「それもそうね。だったら短刀直入に言っわ。私は宇宙連邦所属、地球連邦に亡命したいの」

第4話『スタバ会議』（後書き）

敵機体（中ボス1体・モブ2体）を募集。
多分、次の次に使います。

第5話『クリムゾン小队』（前書き）

どろどろいきます。

第5話『クリムゾン小隊』

「成程、話は分かった」

俺が所属するクリムゾン小隊の隊長、ジュン・クリムゾンは静かに頷いた。今は目を瞑って考えを纏めている。

シャープな顔のラインに鋭い目、高い鼻とアバターの顔の中でも飛び抜けて整っている。金の長髪まで似合っているのだからもはや不思議でならない。

『小隊』と言うのは他のゲームでギルドと呼ばれているものと同じだ。規模によって小隊、中隊とランクアップする。クリムゾン小隊は構成員4名で、小隊の人数が大体が3〜7人なので弱小と評している。

「それでユーリ、その子は可愛いのか？」

ユーリと言うのは小隊内での俺の愛称だ。正式な登録名はユーリウス。『ゆーちゃんは何時でも何処でもゆーちゃん』と言う鈴香の謎理論で決定した名前だ。

……本当に黙っていればカッコイイし、部隊を指揮する隊長は頼りになるのだが、極度の女好きと言う面がある。

『無限の戦場』での女性プレイヤーはかなりレアな存在だ。プレイヤーの前提がガンダムへの愛なのだから仕方ないとはいえ、全体でも2割もいないらしい。それほど対象が狭いのに運営されているのだから、運営側の愛も計りしれない。

余談ではあるが超ロボット対戦シリーズがVRMMO化しないのは色々問題があるかららしい。あれがVRMMOになったらガンダ

ム1本で対抗するのは難しく、『無限の戦場』が廃れてしまう可能性もあるのだと言う。俺はガンダムだって『無限の戦場』を始めてから知つのだから、他のロボット物なんて言われても困るだけだ。

閑話休題。

「リアルに関わるのでノーコメントです」

「いいじゃねえか、お前の客観的判断でいいから」

ええい、話が進まない。

「可愛いです。絶世と言えるくらい」

ひゅうと口笛を吹く隊長。俺の言葉を本気で信じたのか、適当な誇張を含んでいると判断したのかは定かではない。

「いいねえ、可愛子ちゃんは。これで助ける理由プラス1だ」

「隊長は女の子だってだけで助けると思っていました」

「それもあるよ。だから今理由が2つ」

「それで、この話を受けるんですか？」

「まだだな。俺は隊長で3人分の命を預かる立場にいる。だからまだ理由が弱い」

隊長は確かに女好きだが、それでも自分なりに隊長としての信念があるらしい。実際のVRナンパがしたいならもっと女性プレイヤ

ーの多いファンタジーなゲームを選ぶ筈だ。

ピピピツと電子音が響いた。それはプレイヤーがそれぞれ持つ電子端末の物だ。様々なタイプの物があって隊長のは腕時計型、俺のは携帯型（安い）。他のゲームとは違って実体デバイスを使用するのは雰囲気を崩さない為だとか。

隊長が操作するとホロウインドウモニターが現れた。どうやら映像通信の様で、モニタの中には元気な目と鮮やかなオレンジ色の長髪が特徴的な女の子が映っていた。

「ベル、例のOSはどうだ？」

彼女の名前はベルメール。通称ベル、もちろん鈴香のアバターだ。見た目は変わっても内から滲み出るような元気ハツラツは抑えきれず、全くのいつも通り。本当に裏表のないやつだ。

『もう訳わかんない。訳わかんないけど使い勝手は滅茶苦茶良いの。もうビックリ！ 絶対ウチの小隊に入れるべきだよ！』

例のOSと言うのは姫乃から預かったストライク用のOSの事だ。隊長を説得する為に預かったもので、ベルがその性能をテストしていた。

「ほう、じゃあ助ける理由はさらにプラス1だ」

スゴイ、スゴイと喚くベルが映るモニターをサツと消すところらに向き直る隊長。

「俺を含めて隊員4名の危険が4、助ける理由が3だな。後はお前

の意見を聞こうか」

「ローゼンさんはいいんですか？」

「あいつはいいんだよ、あいつの分も含めて俺の理由が2だ」

隊長とはリアルでも付き合いのあるという不在のローゼンさんは俺らの先輩で、一応副隊長となっている。4人しかいない現在意味はないが……。

別にローゼンさんが蔑ろにされている訳ではなく、隊長を信頼し全判断を委ねているだけなのだが、若干悪い気もする。

「ユーリウスとして有能なシステム〇〇開発者エンジニアを隊に入れるのに賛成1。それから、現実リアルで助けを求められた男として彼女を助きたいので、さらに賛成1です」

思い切ってそう宣言してやると隊長はニヤリと笑った。

「言うようになったじゃねーの、ボーズ。よっしゃ！ それじゃあ、そのお姫様を助けに行こうじゃないの！」

第5話『クリムゾン小隊』（後書き）

予定していた通りには書けませんでした。次回少し調整。
MS戦闘がもう1つ先の話になりそうです。

ローゼンさんの名前は直前までラーガンでした。

AGEで出てきたラーガンさんと偶然にも被ってたので変更。

第6話『フリーフィンゲ・ログ』（前書き）

変な内容になっております。

第6話『ブリーフィング・ログ』

姫様救出作戦『オペレーション・マリオ』（命名・ジユン）ブリーフィング記録

結構日時・今週土曜日、20:10より。

週末の大規模戦闘の開始20:00に合わせて行う。腕利きが作戦に出張っている間に素早く掻っ攫うとしよう。

目標・宇宙連邦軍所属、アイシア・ユニバーン。

トップ部隊入りを目指す野心的な中規模部隊に所属しているらしく、亡命にはそれなりの警戒がある様子。残念ながら機体は諦めるべき。

作戦内容

潜入1名が姫様を確保、外からの攻撃を合図に宇宙港からMSで脱出。追撃部隊がいた場合は他の2機で迎撃し、素早く逃げる。

作戦担当

潜入・ユーリウス/エールストライクR（使い捨てブースター
装備）

迎撃・ジユン/クシャトリヤゼロカスタム

ローゼン/万象

待機・ベルメール

今回の任務は電撃作戦が望ましい。理由は単純にこちらの戦力不足だ。幸い多くの機体が機動力のある機体なので成功確率が高いと思われる。

腕の立つ連中が大規模戦闘に参加している裏で動くことが前提なので、もしもEース級の敵機が現れた場合、ユーリウスは離脱最優先。最悪の場合迎撃の2機が落ちても足止めする。デスペナルティは痛い^{〇〇開発者}が、優れたシステムエンジニア（しかも可愛い女の子）は今後の部隊発展に大きな力となる事が容易に予想できる。厳しい作戦になるが尽力して貰いたい。

1：ローゼン

結構大雑把だな。

2：ジュン

1<<いや、他に何も無いから。ホント強い奴が出てこなければいいんだけどねえ……

3：ベルメール

2<<あんまり言つとフラグになるよ。

4：ユーリウス

つて、なんで俺が潜入なんですか！

5：ジュン

4<<だつてユーリ攻撃避けるのは得意じゃん。

6：ユーリウス

5<<隊長もうすぐ階級上がりそうなのに迎撃とか危険ですつて！

7：ジュン

6<<いやいや、適材適所だつて。

8：ベルメール

6<<そうだよー。私なんて機動力無いからお留守番なんだよ。

9：ローゼン

そう言えば、アイシアって最近噂の宇宙連邦の姫様か？

10：ユーリウス

9<<なんです、それ？

11：ジユン

9<<そう言えばどこかでスクショ見たな。

これか <http://sennejyou.apacex>

www.com/gw%E9%81%8A%E6%88/

12：ベルメール

9<<私も聞いたことあるかも、地球連邦の技術屋の間でも話題沸騰中。「奴は天才かー！」って。

13：ユーリウス

12<<天才……ね。

第6話『ブリーフィング・ログ』（後書き）

なんか変な話（？）になりました。どうだったでしょうか？
不評があれば今後使うこともありません。特に反応が無ければま
た使うかもしれません。

第7話『20:10』（前書き）

作戦開始直前です。説明しそこねた部分の補足です。

たぶん分かりにくいと思います。自分でも良く分かっていないので。

第7話『20:10』

土曜日、20:09。

じっと見続けていた時刻表示が、そう示したのを確認して端末をしまい込む。作戦開始を待つてじっと座っていたベンチから立ち上がる。既にここは宇宙連邦のテリトリーの中で、声をかけられたりしないか不安だったが杞憂に終わった。

今回の任務は普段のミッションとは違うので緊張が絶えない。普段のミッションは『○○○を○体倒せ』とか『○分間防衛せよ』とかだ。変り種で言えばこの前したばかりの『デブリ帯を飛び抜ける』と言うタイムアタック系だったり。

しかし、今回は違う。ゲーム的なミッションではないのだ。

正式には強奪ミッションという。敵地に潜入し何かしらを持ち逃げるミッションだ。だが、ゲーム側からのサポートは潜入する所までだ。

つまり、潜入した後は保証されない。そして強奪できるのはそこにある物だけだ。そして報酬は基本的に無い。

最初からそこに何があるのか分かっていなければ意味の無いミッション。

その特性から大きく意味が変わる。

MSなどを強奪するには内通者が必要になる。むしろMSを強奪する以上にプレイヤーを拉致、もしくは亡命に使用されるようになった。

プレイヤーはそれぞれ連邦軍に所属する。1人で複数のキャラを作ることはできない。別勢力に移行したければキャラを作り直すか、

この亡命ミッション以外にない。そして、廃プレイヤー用のゲームとして確立する『無限の戦場』でキャラ替えはかなり致命的と言っている。

亡命の理由は色々あるだろうが、今回の姫乃の理由は俺や隊長が納得するだけじゃあつた。

OS開発の天才として宇宙連邦で有名となった姫乃はまさに引っぱりだこ。もはや自己主張すら尊重されないとこまで行ってしまつたらしい。

大げさなようだがOS開発者システムエンジニア、しかも天才級となれば仕方ないとしか言いようがない。それだけOSの重要性は高いのだ。

プレイヤー、機体、OS、どれか1つでも欠けてはいけない。バランスが大事だとも言える。機体を組むのはそこまで難しくない。確かに腕のいい人はいるが個人的にできないこともない。しかしOSは別だ。素人では理解すらできない。実戦に耐えうるOSを作れる人はそれだけで重宝されるのだ。出来る人は100人に1人、上手い人になると1万人に1人。天才と呼ばれる程になるとゲーム全体で5人もいないんじゃないかと言う。そう言った有名な人は軒並みトップ部隊の専属になっている。

中規模の部隊に突然現れた天才OS開発者、しかも女の子となればどこの勢力も確保したかつたらしく、姫乃自体相当参っているらしい。

ピピッと懐の端末が短い音を鳴らす。時間のようだ。

指定されたドアをくぐるとそこに1度だけスクリーンショットで
見たお姫様がいた。

第7話『20:10』（後書き）

次こそMS戦闘（と言いか逃走）です。

第8話『スクランブル』（前書き）

なかなか進まないのは仕様。

第8話『スクランブル』

次々と光が灯り、真っ暗だった狭いコックピットを照らす。狭いと言っても一人乗りなので広くある必要も無く、むしろ手に届く範囲に無ければ困る物（様々なスイッチ類）ばかりなのでちょうどいいサイズになっている。

しかし、それは1人で乗る場合に限る。そもそも2人乗る事は想定外で作られているのがコックピットというものだ。

「なかなかいい内装をしているのね。これも秋原さんがしたのかしら?」

「そうだよ。基本的にうちの小隊の機体は鈴香に任せてる」

OSだけでなくその他のカスタマイズにも関心があるらしい『お姫様』。アバター名はアイシア。もちろん姫乃愛沙のアバターだ。

このアバターのカスタムがまたスゴイ。

目も覚めるようなクリアブルーの髪色なんて普通使わない。こんな派手な色だと顔と全く合わず、違和感だけが残ることが多い。なのにそんな違和感は微塵も感じられない、見事なカスタムだ。『ラクス・クライン』に似たフワフワ感を持つ長い髪も相まって本当にお姫様なのではないかと錯覚しそうだ。

ズズンと低く重たい音と振動がMSのコックピットに響く。作戦開始の合図だ。

「じゃあ、発進する。出来るだけ慎重に行くけど、敵が来たら構ってられないかも。その時はしっかりしがみついて置いてくれ」

「了解、名乗らないの？」

名乗る？ 『○、出るぞ！』 みたいなやつか？

「……船でもカタパルトデッキでもないからな」

残念。そうつぶやく姫乃は楽しそうだった。こっちは重大任務で気が重いつていうのに。

MSを覆い隠していた幌を払い、立ち上がるとそこはコロニーの搬入口内部だ。こんなところまでMSを運び込むのはかなり難しいことのでかなりの費用と人材が必要となる。と言う設定でミッションを受けるためにお金を払わなければならない。このお金は小隊の貯金から出してもらっている。

成功すれば（成功報酬として）返ってくるが、失敗すれば一銭も残らない。今回背負ったリスクは計り知れないものがある。

今回操る機体はこの前別れを告げたばかりの『ストライク』、もちろん『エールストライカー』を装備している。なんだか居心地が悪いような気がしないでもない。

予定通りなら今頃は新型機の訓練をしていた筈なのだ。訓練も無しでいきなり実戦に出るのは最も愚かな行為と言われるし、今回のミッションに失敗は許されない。

もう一度俺に力を貸してくれよ。

そう想いを込めてトリガーを引いた。

混乱と爆発を突き抜けて港から飛び出る。
煙の中をくぐり抜けるとそこは黒く広がる宇宙^{ソラ}だった。重力のない自由な宇宙をバーニアに押されながら飛ぶ。

「追加ブースターを使う」

そうやってスイッチを入れると機体の速度は一気に上がる。エルストライクの最高速度を越える勢いだ。

出来ることなら追ってが来る前にこの空域を抜きたい。が、そう簡単に行くわけもなく……。

「ッー!!」

突然のアラームに反応し、左にロールして後ろからのビームを躲す。数は2本。レーダーに表示される敵影は3機、カラーパターンはCPU機の物だ。

CPU機と言うのは文字通りCPUが操る機体だ。部隊の予備戦力としてお金を払って配備することができる。CPUは強くないが、安い値段でもないので正直その金銭的余裕が羨ましい。

「ムラサメのMA形態よ。厄介な相手ね、追いつかれる」

姫乃が素早く情報を教えてくれた。「ムラサメ」。今回最も出くわしたくなかった機体だ。

ムラサメは『SEED DESTINY』で登場したオーブ軍のMSだ。戦闘機に変形することができ、その時の最高速度は今のストライクより上。緊急発進時^{スクランブル}にその本領が発揮され、しかも量産機なのである程度値段も抑えられるが、最近人気の機体なので市場では値段も上がり気味だ。

「ちょっと荒っぽくなるから気を付けてくれ！」

そう言ってブースト残量を確認すると、後15秒も残っていないかった。

「0カウントで機体を跳ね上げる、舌を噛むなよ！」

「わかった！」

敵からの射撃を躲しながらタイミングを取る。

「4……、3……、2……、1……、0……！」

フットペダルを思いっきり踏んで、レバーを引っ張る。前傾姿勢だったストライクは両足を前に放り出すような姿勢へと変わり、進行方向へと噴射されたバーシアが急ブレーキとなる。

しかし、動きの流れはそこで止まらない（こんな所で止まったら蜂の巣だ）。急ブレーキによって発生したGを全身で感じながら、フットペダルから足を放してもう一度蹴る。

すると、ストライクは俺の意思を酌んだかのように、足から上方へ跳ね上がる。余計な力を入れずに慎重にレバーを操作して機体を回転させる。

後方宙返り。

俺のことを全力で追っかけてきた3機のムラサメが眼下にあった。その3機をビームライフルで狙い撃つ。

1 発目、1 番近くのムラサメの中央部を貫き爆散。

2 発目、3 機の内、真ん中だったため大きな回避が行えず、右の翼に着弾。

3 発目、一番遠く、タイミング的にも遅かったため当たらず。

高速の機動戦にも関わらず、ゆっくりと感じるその動きを不思議に感じつつ、今日は調子いいと感じた。いつの間にか緊張感が高揚感へと変貌を遂げているのがわかる。

後2機。内、1機の機動力は落ちてる……。行けるか？

そんな血の気の多い事を考えたが、そんな余裕は動きの遅くなったムラサメを薙ぎ払う高出力ビームにかき消された。

『すまない！ 遅くなった』

それは信頼できる先輩達、迎撃組の2人だった。

第8話『スクランブル』（後書き）

主人公機（新型）が決まりません。どーしましょ。

第9話『純白と燦銀』（前書き）

今後、更新ペースが落ちる可能性有り。まだ、分かりませんが…。

第9話『純白と燻銀』

黒い宇宙を引き裂くような純白、『クシャトリヤゼロカスタム』。元々『四枚羽根』と呼ばれる由縁となった四枚の大型バインダーは『ウイングガンダムゼロカスタム』の天使的な翼に似たカスタムが施されている。だから通称『四枚翼』、文字通り『クシャトリヤ』のゼロカスタムである。

その純白に追隨するのは、至って目立たず、しかし光を反射する装甲を身に纏った、燻銀の機影、『万象』。元々金色だった『百式』を改造した機体で、打たれ弱い装甲を更に削って機動力に変えており、幾分、スマートになった腰にはニンジャソードまで装備している。溢れる渋さが光る機体だ。

『ユーリ、作戦通り頼む。他にも来るみたいだが、そいつらは俺らが止める』

「……………了解」

『……………』

クシャトリヤに乗る隊長からの命令。そして無言のままアツサリと、最後のムラサメを刈り取った万象に乗る頼れる先輩、ローゼンさん。万象の渋い意匠は当然パイロットであるローゼンさんの趣味である。

そうだ、俺の仕事は姫様を無事に連れ帰ることだ。気づかないうちに熱くなっていた。

「今から全速力で宙域を離脱する」

僚機の2機と、同乗する姫乃に対して確認を取る。先輩方はそれぞれ了解と返信をくれた。が、姫乃からの反応はない。

「アイシア、どうした？」

通信は生きているので、現実での名前を出してはいけない。なのでまだ慣れないアバターネームで呼びかける。

「……ビックリしたわよ」

「はあ？」

「ッ！ アンタ、人が乗ってんのにいきなりなんて動きしてんのよ！」

「いや、ちゃんと警告はしただろ？」

「したわよ！」

じゃあ、どうしろと言うんだ。

「まさか、あんなアクロバティックな動きをするなんて思わないじゃない！ 大尉クラスでもあんな動きできないわよ！」

取り敢えず元気そうだし、舌を噛んだわけでもなさそうなので安心。宙域離脱を目指して前進する。

「確か、まだ准尉に上がったばかりかだって言ってッ！」

あ、ヤバイ。急上昇をかけた瞬間言葉が途切れた。今度は舌を噛んだのかもしれない。別に意地悪とかそういう訳ではない。追手が来たようだ。

さっきまで機体があった場所をビームが貫いていった。下手したら一撃で落ちていたかもしれない。緊急事態だったということでもらえるように願おう。

『すまん。そっちに隊長機っぽいのが行った!』

「ええ、来てますね。……舌、大丈夫か？」

「ほほいつひいはんはは」

「すまん……」

なんとなく言ってるのかは不明瞭だったが、涙声のその声は明確に意味を伝えてくれた。本当に悪いことをしたと思っている。

第9話『純白と燦銀』（後書き）

作中の改造機紹介 は、まだしません。

少し理由もありますが、大体は面倒なので……。
需要がありそうならします。その辺も含めてご意見等お待ちしております。

ちょっと変更。

OS開発者 システムエンジニア

おかしいですかね？

第10話『名付けられない感情』(前書き)

サブタイに悩みつつ10話です。

第10話『名付けられない感情』

逆さま（宇宙空間に上下の概念は無いが）になってビームの出処を探る。リーダーがまだ遠い位置にいる敵影を補足した。

『クッククク。運の悪い奴よなあ、俺様が居る時に略奪行為とは…』

プレイヤー同士の戦いを盛り上げるために用意された、フリー回線から聞こえてくるのは敵機のパイロットの声だ。芝居がかった声は聞いていて、あまり心地よいものではない。ナリキリプレイは別に嫌いでも無いのだが……。

ザク系統の改造機と思わしき機体は、未だ知識の少ない俺には詳しい判別ができない。ただ、紫をベースとした悪趣味な配色が酷い。

「あれは……くフかひら？」

グフと言いたかったらしい。そのグフ（仮）の装備は無難なビームライフルの様だ。

『大人しく落とされるがいいわ！！』

「誰が落とされるか！」

2発、3発と襲い来るビームをクルクルと回避しながら逃げ回る。使いすぎたスラストが悲鳴の警告を上げる！

「ちょっと、逃げ切れないわよ！」

「わかってるよ！」

姫乃が大きな声を上げている。どうやら噛んだ舌は癒えた様だ。そうしている間にも敵機はどんどん迫ってくる。

『フハハハ！ 逃げてばかりではないか！！』

次々と放たれるビームが、紙一重の所を掠めていくたびに背筋がゾワリとする。しかし、あれだけ調子に乗って乱発していれば……。

『ッ！ ちい！！』

回線越しに聞こえた小さな舌打ちと唐突に止んだビームの雨。予想通り、弾切れだ。

「ふっ！」

攻守一転。逃げ続けていた俺は一瞬の隙を逃さず、ビームサーベルを抜いて切りかかる。

『小癩なア！』

相手を取り出したのは鞭のような武器で、少し驚いた。が、反撃に対する反撃は苦し紛れで、その攻撃の軌道は読みやすいものだった。

攻撃を掻い潜った俺の目の前には、無防備な胴体が曝け出された。

「うおおおおー！！」

柄にもなく雄叫びを上げて一突き。ブームサーベルの根元まで深く突き刺さる。既に回線は閉じていた。

直ぐにサーベルを引き抜くと、背を向けて離れる。背後で機体の散る音がした。

『こちらジュン、聞こえるか？ 他の追手は落とした。そっちは無事か？』

「ええ、無事です。こっちも落としました」

『そうか、すまなかった。だが、これで任務は成功だ。よくやった』

「ありがとうございます」

隊長の言葉を聞いて、2度の戦闘行為で昂っていた感情が落ち着いていくのを感じた。この安堵感と寂しさの入り交じった感情は、いつ感じても慣れないと思った。

第10話『名付けられない感情』（後書き）

敵キャラについてはもう少しキャラ立てしたりしたかったですが、そうすると進めなさそうだったので簡単に済ませました。今後出てくることは無いです。多分。

また、味のある敵機体が浮かびません。メジャー所しか知らない、偏った知識のせいです。ライバル機（予定）の機体もありふれたものになりそうで……。

キャラ、機体、その他のアイデア。または単なる感想等、お待ちしております。

グフ（仮）カスタム

敵小隊長の機体。長くて変な名前がついていて、悪趣味なカラーリング。

ウイングの付いたバックパックで機動力を強化し、ビームライフルを持ったありふれた機体。

第11話『笑顔』（前書き）

という訳で（？）第一部完です。短かったり、戦闘が少なかったりでしたが、まあ、導入部分なので仕方ないです。

第11話『笑顔』

大きな窓の外には広々とした大宇宙があつた。

ここは艦船の展望室（詳しくはよく知らないが観賞用、結構人気がある）で買ってきたドリンクを飲んでいた。

ゲーム内で空腹感を満たしてしまい、現実では栄養失調。と言つた例も少なくなかつたため、食べ物類は高価で、それも軍事食的なあまり美味しくないものばかりだ。（なかにはそれが好きな人もいる）特別な場合のみゲーム内で宴会が開けるらしい。

どうでも良いことを考えながらボーッと宇宙を眺めていると展望室のスライドドアが小さな音と共に開いた。

「いい景色よね」

厳しい任務を経て、小隊の新たな一員となつたばかりのアイシアだつた。

「そうですね、姫様」

「アイシアって呼びなさい」

「……」

「姫様の命令よ」

使えるものは皮肉でも使う、そんな感じだつた。

「へいへい、アイシア。これでいいか？」

よろしい。芝居がかった一言を最後に展望室は静けさに包まれた。
2人揃ってただ外を見ていた。

「大好きなの、ガンダム」

沈黙を破ったのはアイシアで、唐突に何かを語りだした。チラリと盗み見た彼女の瞳は真剣で、黙って聞き役に徹する事を決めた。

「だから『無限の戦場』を止めようかなって思ったの」

「って、おい」

黙っていらなかった。話が矛盾してるじゃないか。

だが、ちよつと黙って、と言う目にそれ以上は何も言えず、また沈黙。

「私が初めて見たガンダムは『SEED DESTINY』でね、
それから他の作品も色々見たわ」

俺が最初に見たのは『SEED』だったな。『DESTINY』
はその続編だけど、そこから見て大丈夫だったのだろうか。

「主人公もその他の人もみんな戦っているの。でもみんなの願いは
同じだったのよ、みんな戦いたくなかった」

一部例外を除いてね、とアイシアは言う。『G』とかだろうか？

「どのシリーズでも共通して言えるのは、戦いがどれだけ虚しい物
かって事だと、私は思うの」

「『また戦争がしたいのか、アンタたちは!』だっけ?」

「『DESTINY』のシンの台詞ね。私も好きな台詞だわ」

主人公（笑）の台詞が好きなのか。でも、言われてみれば一理あるような気がする。

少なくとも、どの主人公は平和を強く望んでいた。（と思う）

「でも、『無限の戦場』にそんな気持ちは無かった。ただ『無限』に戦い続ける『戦場』しか無いわ」

それはそうだ。プレイヤーが望む限り、『無限の戦場』はその有り様を変えることはない。もしどちらかの連邦軍が戦争を終決させたとしても、新規アップデートされて、再び混沌とした戦場に戻る。すでに10年近い戦争は終わらない。これからもずっと。

「今回みたいな面倒なこともあったから、もう辞めてもいいかなって思ったの」

でも、ガンダムは好きだった。

「だから、賭けをしたの。無事に亡命が成功すれば続ける。失敗すればキッパリと辞めるって」

それは、言うのは簡単でも、成功確率はあまり高くない。失敗した際のリスクの高さから、余程の事がなければ挑戦しようとは思わないミッシェンだ。協力者を得るのがまず難しい。

「こうして成功したから、続けることにする。新しい楽しみも見つ

かったしね」

「それは良かった」

そう言って貰えれば頑張った甲斐があったというもの。誇らしさすら胸に宿る気持ちだ。

「それじゃ、また月曜日だね」

ああ言われて、クラスメイトだった事を思い出した。寧ろ忘れていた自分はどうかしているのかも。

「ああ、またな」

展望室を後にするアイシアにヒラヒラと手を振った。

「気を付け、礼」

さよーならーと、気の抜ける挨拶をして今日の学校は終わりを告げた。

先週の『姫様からのアプローチ』について友人から問い詰められたり、宿題を忘れたり、なかなかハードな月曜日を過ごした俺は、やや乱暴に腰を降ろす。

「いい加減吐いて楽になりなよ、あんちゃん」

やたらとしつこい隣席の友人に、だからなんでも無い、と答えつつ帰り支度を整える。

「美空君」

その優しいな声にビクツとした。顔を上げれば予想通り、笑顔の姫乃が立っていた。

「一緒に帰りませんか？」

その一言に周囲（特に隣席）の連中がざわついた。煩いが、かまってもいられない。俺は猫を被った姫乃の真意を探るので精一杯だ。笑顔の裏に隠された意図は読めないが、断れるような雰囲気でもないことだけはヒシヒシと感じた。

「あ、ああ」

どうにか引きつった口でそれだけを返すと、

「じゃあ、早くいきましよう」

手を取られて強引に引つ張られた。もちろん、それ自体には大した力もなく、逃げることで出て来た。しかし、その手を振り払うことができる男子がいるだろうか？

2度目の事だが、前回よりも大いに親密度が増していることに、教室では前にも増した喧騒が溢れた。

週末に何かあったに違いない。まさか付き合っているのか。など、根も葉も無い噂が飛び交っているようで、明日から引き籠りの仲間入りしたくなってきた。

「ちょっとー！！ ゆーちゃん！ 姫乃さんー！」

さらには隣のクラスから飛び出てきて、ことらへと猛ダツシユしてくる鈴香まで現れた。もう、どうにでもなれ。

しかし、俺の手を引っ張る姫乃の表情が、今までに見た中でも最も輝いていたので、若干の憂鬱は吹き飛ばしてくれた。

第11話『笑顔』（後書き）

第一部完&10日間連続投稿となりましたので、今後の投稿ペー
スが落ちます。

その分、しっかりと練った話を書きたいと思っているので、頑張
ります。

予定は最低でも週1本を目処にしたいと思います。

現在、機体などのアイデアが生まれずに困っているのでアイデア
を募集しております。アイデアがでないと本格的な戦闘に入れない
ので更新に直結しそうです。

感想、アイデア等は首を長くして待っています。

次回予告。

小隊長、ジュンさんが部隊拡大のために動き出す。

隊員達はそれぞれレベルアップのため別れて活動を始める。

そして、遂にベールを脱ぐユーリウスの新機体とは。

次回、第12話『起動』。

お楽しみに！

第12話『起動』(前書き)

今回から第2章。週1更新予定です。

タイトルだけ見てどんな内容かわかりやすいように、ちょこっと変更しました。(10/23)

第12話『起動』

「えー、みんなよく集まってくれた」

「ここは小隊長以上が借りることができるフリー会議室だ。最もグリードが低い、その分狭い部屋だが、全5名のクリムゾン小隊にとってはまだ余裕がある。」

「部屋にいるのは隊長、ローゼンさん、ベル、アイシア、そして俺。今日は隊長の呼び出しで集まった。人数が少ないこともそうだが、5人中3人が同じ学校なので予定の合わせやすさは折り紙つきだ。」

「みんな知つての通り、我が小隊に新たなメンバーが加わった」

「アイシアです。改めてよろしく申し上げます」

隊長に促されたアイシアが丁寧に挨拶をする。俺とベルの前では被らない猫を被っている。現実^{リアル}でもそうだが、仮想世界の中でも続けるらしい。

「彼女は飛びつきり優秀なシステムエンジニアだ。これがどう言うことが分かっているな？」

普段は女の子のことはばかり考えているように見える隊長だが、キチンとやるべきことはやる人で、今の真剣な眼差しをすれば女の子の方から寄ってくるんじゃないかと思うほどだ。

「我が小隊には優秀なメカニックとシステムエンジニアが揃ったことになる」

『優秀なメカニック』と呼ばれたベルはテレテレしている。見た目はお馬鹿なのだが……。天才となんとやらは紙一重ってか。

「これだけの人材が揃っていて、何時までも小さな部隊のままでは笑われてしまう」

主に隊長の俺が。と言う言葉は聞かなかったことにする。きっと場を和ませるジョークの類だ。

「よって、部隊強化作戦を実行する。都合のいいことに明日からG^{コールテン}Wだ。まさか予定が詰まっていますって言うリア充はいないよな？」

ふっ。何を隠そう俺は、『無限の戦場』をするために予定は真っ白にしてあるぜ。休み中の宿題も配られてからすぐ始め、姫乃と鈴香に教えてもらい、もう終わらせた。準備は万端だった。

部隊強化作戦。

ジュン

中隊長資格試験・新隊員勧誘

ラーガン

中隊長資格試験・中隊用戦艦調達

ユーリウス

小隊長資格試験・新型機訓練

ベルメール

新型機調整・戦艦改造

アイシア

隊員機OS調整（新型機を優先して）

「それで新型機ってなんなの？」

それぞれ行動を起こすため解散となったあと、アイシアが素の様子で訪ねてきた。

「今から見に行くから着いてきて」

会議室を出て転送ポートに乗る。移動などは割と簡略化されていたりする。個別に用意しなければならないハンガーなどは特にそうだが、専用艦の中だと自由に行き来したり出来るそうなのでそれも楽しみだ。

ポートに乗って転送先を指定すれば一瞬の内に個人ハンガーへとたどり着く。ライトを点けて暗い倉庫の真ん中、鎮座するMSへと近づく。

真新しい装甲がライトの光を弾く。これが俺の新しい相棒。『ZGMF-X20A ストライクフリーダム』だ。

「え……。ストフリ？ 嘘お」

半ば呆れたようなその声に、やっぱりそんな反応をするよなあ、
とため息をついた。

無理もない。なぜならストライクフリーダムはもはや、誰も使おうとしない機体の一群に属しているのだから。

第12話『起動』（後書き）

起動……したのはクリムゾン小隊がってことで。

やっぱりストフリがよかったんです。自分の中で一番印象強いです。

ゼロカス、ノワール、ダブルオーとかも好きです。そのほかはアストレイとかですかね？ あ、アストレイ出したくなった！（直感的に）

次回予告。

ストライクフリーダムが不人気な理由とは？

それでも使おうと断言するユーリウスに心動かされるアイシア。

天才が導き出す答えとは……！

次回、第13話『理由』。

お楽しみに！

第13話『理由』（前書き）

グラハム。本当に名言（？）が多くて……。
本当に尊敬するわー！。

週1更新予定にすると後が詰まるので変更。週2更新が基本にします。

1本は日曜日、もう1本は木曜日前後で。

第13話『理由』

「ストライクフリーダムって、本気なの？」

「ああ、本気だ」

何を言われようと俺はストライクフリーダムを使う。むしろこの機体に乗りたいがために、このゲームを始めたと言っている。

例え、実戦では使えない子扱いされていてもだ。

ガンダム、キュベレイ、サザビー、クシャトリヤ、ストライクフリーダム等。これらは殆んど使われない機体達だ。

わかる人にはその理由を容易に想像出来ることだろう。共通する大きな特徴があるからだ。

ファンネル、ビット、ドラグーン。これらを装備した機体であることだ。名称は違うが似たような兵器である。

ドラグーンを例に説明しよう。(SEEDが好きなので)

ドラグーン・システム。(Disconnected Rapid Armament Group Overlook Operation Network・system:分離式統合制御高速機動兵装群ネットワーク・システム)

『多数の攻撃端末を同時に操ってオールレンジ、もしくは複数の敵に攻撃を行う広領域戦闘性に優れた兵装。操作制御には操縦桿等

による手動操作は一切必要とされず、神経接続によって動かす』と言う武装だ。

肝心の神経接続も、そもそもVR技術が実現しているので再現は簡単だったらしい。

しかし、この機体に乗ったパイロットを思い出して欲しい。

ニュータイプ、強化人間、コーディネイター等。いずれも人の領域から一歩踏み出た人達ばかり。

設定的にも普通の人間には手に負えない武装なのだ。

使うこと自体は出来る。だが、半オートで敵に飛ばすのが精一杯で、ベテランに対しては5機飛ばしても当たらないのが普通だ。全機飛ばして何とか当てたとして、エネルギーの消費と結果が釣り合わない。

ついでに言えば隊長でも使いこなせず、クシャトリヤもファンネルを全て外し、余剰出力をスラスタに、軽くなった重量分装甲を追加することで、機体速度を変えずに防御力を強化した機体だ。ゼロカスウイングが対ビーム耐性を備えていることも相まって、俺はまだあの人が落ちる所を見た記憶がない。

閑話休題。

ともあれ、結果的にこれらの機体は、実戦では使い物にならないと烙印を押された。人気があっても使用されることが無い機体となったのだ。

「実際にこの類の機体を使いこなした人がいないのよ。本当に分か

って言ってるの?」

「男の誓いに、訂正は無い」

アイシアがちょっと引いてる。ネタの意味が分かっているなら同類だろう? 言ったら反撃を受けそうなので言わないが。

「冗談はともかく、俺にとってこのゲームは、この機体に乗らなきゃ意味がないんだ」

やっとスタートラインに立ったんだよと、俺の断固とした意思を表す。他の小隊の面々とは既に話し合って決めたことだ。このことで1度仲違いしそうになったが、それを乗り越えた今では、より強い絆で結ばれている気がする。

「……分かった上で言ってるんなら止められない。機体の選択は個人の自由よね。それに……」

言葉を切ったアイシアは目を大きく見開いてストライクフリーダムを見上げる。アニメとかだったら輝いてそうな目だ。

「私もこの機体大好きなの。全く使われていないと知ったときは、酷く悲しかったわ」

アイシアが大きな目をこちらに向けて続ける。本当に綺麗と言っか……。

「この子が自由に戦場を飛ぶのを見てみたい。あなたに私の夢を預けるわ。代わりにOSはあなた専用の最高の物を作ってみせるわ」

断固たる意思。天才の本気を俺は見た。揺るぎない情熱を秘めた瞳が俺を見据える。

「……頼む」

真剣なアイシアに対して気の利いた言葉も言えず、一言だけ溢れた。様々な言いたいことから搾り出したと言ってもいい。

「ええ。じゃあ今までの戦闘データ見せて。それからその時の機体のデータ……これはベルメールさんに聞いた方がいいのかな？ あ、最新のデータも欲しいわね。この前の機動性の高さも気になるし、実際に見たほうがいいのかも。確か資格試験受けるのよね？ それを見ることにするわ。早速行きましょう」

……任せて早々、主導権握られたのは失敗だったかなあ、と思い始めていた。

第13話『理由』（後書き）

第2章に入って直ぐで気が早いのですが、この先の展開について少し質問。

ヒロインも言いましたが本質は命のやり取りの部分に出るので、やはりデスゲーム化は避けて通れないと思っています。

そこでデスゲームにする際、その原因は科学的に説明できないと駄目でしょうか？

このままだとあまり良い案が浮かばず、ちよつとファンタジー的になりそうです。それでもしょうがないですかね？

次回予告。

という訳で、やってきました小隊長試験。

実力的には心配いらなと言われても、やっぱり緊張はするもので。

しかも、アイシアが直前に手を加えたOSは驚くような性能で…

…。

次回『試験』。

サブタイは別に漢字2字固定じゃないよ、偶然だよ。お楽しみに！

第14話『試験』（前書き）

こんなんでよかったのかなあ？

第14話『試験』

『大丈夫だって、お前ならやれるさ』byジュン

『……心配するな』byローゼン

i 『一定以上の実力を持つものならクリアは難しくない』byOik

小隊長資格試験を受けるにあたって、事前の情報収集で得たものはこれだけだった。しかし、

「だ、騙されたー！ー！」

敵、敵、敵、敵、敵。その数なんと15体。とても大丈夫な数には見えない。

「一体どうしろって言うんだ!？」

小隊長資格試験。

『無限の戦場』の世界にある資格と呼ばれ、他のゲームではスキルにあたるものだ。他に技術士メカニックの資格などもある。

小隊長の資格は最も取る人が多い資格だ。持っているなと小隊長になることが出来ないの、条件（准将以上）を満たすと大体の人が受けるのだ。俺は今まで後輩がいなかったの、取る必要も無かった。今後、部隊を強化するから必要になる。

○ikiには、それほど難易度は高くはないとしか書かれておらず、試験の概要は、最大4名までの小隊で、敵部隊を迎撃するというものだった。

他の小隊メンバーはそれぞれ別の仕事があるので、1人での挑戦する。隊長達にも太鼓判を押されたので問題は無いはずだった。

しかし、現状はどうだろう？

あれよあれよと言う間に三機一個小隊が5つで、CPUにしては高度な連携を取っている。止むことのない攻撃に身をさらされ、避けるので精一杯だ。

敵は小隊ごとに種類が違って5種類。どれも量産機のようなのだが、ハッキリとは分からない。地球連邦の任務なので、いずれもザク系統の機体であることだけは確かだ。

「右、左、右、上……」

避け続けながら観察を続ける。相手は基本的に近接戦闘に持ち込まないように一定以上の距離を保つ。そして、味方を撃たないような位置取りをしている。

15機と言うのは確かに大変ではあるが、冷静に見れば多過ぎる数で、生かききれていない。

気のせいか、何時もよりストライクが軽快に動いてくれている気がする。普段ならこんな弾の雨を全て避け切れるとは思えない。

だが、何時までも逃げ切れる筈も無く、エネルギーが切れるまでに切り返す必要があった。

「何か活路は……」

数の力、高度な連携、これらを崩すには？　こちらの有利な部分
は？

不意に、何かが引つかかる感覚。相手の連携の動き。これは……

「そうか、パターンのなんだ」

いくら高度とはいえ、相手はCUP。数の多さに惑わされそうになるが、そこには一定のパターン性がある事に気づく。

そうだ、これはゲームだ。クリア出来ないゲームは無い。何処かに勝機は必ずある。希望はまだ捨てない。

相手の動き、広い宇宙空間、光るセンサー、それら全てに目を配り、探す。圧倒的な数の差をひっくり返す為に、もう一つピースが必要だった。

「！！」

そして見つけた最後の勝機。一番最初に浮かんでもおかしくない、それは地形。

苦手でももっとシミュレーションゲームをやっておくべきだった。そうすればもっと早く気がつけただろう。それは宇宙に漂うゴミ、

スペースデブリ。

デブリ帯は、こちらにも危険な場所だが、多数で動くにはもっと危険だ。相手はバラバラにならざる負えない。これで数の有利は失われた。

「反撃だ……!!」

エネルギー残量は半分を割っている。悠長に相手の動きを見ている暇は無かった。

部隊の中でも突出した3機が、デブリの影から出てくるのを奇襲して、一気に落とす。1、2、ワンテンポ置いて3。

纏まった6機に背後から突っ込む。予想通り、近接戦闘には弱く、敵と味方が近ければ射撃も躊躇するA Iを容赦なく散らす。

残りエネルギーは約30%。敵は半分以下の6機となった。

なかなか賢いのか、全部隊突入はせず、デブリ帯の外で俺を待ち構えているようだ。

「はあはあ。……こっからはガチンコか」

あっちが来ないなら、こっちから行くしかない。エネルギーは残り少なく、策はもう無い。

なのに、俺は笑っていた

「よく、クリア出来たわね」

精神的にボロボロになって帰還した俺を迎えたのは、アイシアの呆れ顔だった。

「文句でもあんのか？」

「大有りよ。なんで任務成功してんのよ」

「はあ？」

意味が分からなかったところ、アイシアは懇切丁寧な口調で説明してくれる。

「伝統的に、試験は最初1人で受けさせる」

それこそ何年も前から伝統として受け継がれて来たらしい。O i k i に詳細が載っていないのもそれが理由らしい。

「一度、徹底的に負けて、一回り成長してもらおう」

単純な話、あれは1人では到底クリア出来ないような数に設定してある。隊長の試験だから単機でやっても意味が無いと言う訳だ。

「一度負けたらブリーフィングをして、連携と作戦の大切さを理解する。その上で僚機を伴ってリトライ」

なかでは意地になって1人でクリアを目指す人もいるらしい。それでも、知恵を最大限に発揮し、何度も挑戦する中で、連携と作戦の意味は身にしみて理解するらしい。

「で、なんでクリアしてきたの？」

理不尽だ！

第14話『試験』（後書き）

戦闘は省略！？ 15機もいるとね。仕方なかったんです。
あんまりにも進まないものだから2日に1度更新（予定）

次回予告。

試験で常識外れな機動力を見せたユーリウス。

アイシアは散々嫌味を言いつつ、その可能性に魅せられていた。
そして、天才の全力が発揮される。

次回『可能性』。

お楽しみに！

第15話『可能性』(前書き)

動きがありません。もう少し長めにしたほうが良いんですかね？

第15話『可能性』

「データは揃ったけど、本当に信じられない動きね」

「それ、褒めてるのか?」

「半分はね」

もう半分はどうした。

「なんで、真後ろからの射撃を躲せるのよ」

そう言ってアイシアが示したのは先程の試験の映像だった。最後の6機と交戦している様子だ。敵機の真ん中で回転しながら6機を同時に相手している。

「見えてるの? 感じてるの? ニュータイプなの?」

「後ろに目はないから見えないし、第六感もないから感じない。勿論ニュータイプでもない。予測出来る攻撃位、避けれるだろ?」

「予測?」

「ああ、360度見渡すことは出来ないから、グルグル回ってるんだぜ?」

「はあ? あのコーヒーカップみたいな状況で全部把握してるの?」

「コーヒーカップって……。あながち間違っただけで無い気もするけどさ。」

「それでもしないと、6機も相手に出来ないって」

「それもそう……。じゃなくて。予測つてなによ？」

「え、だから相手がこの後どう動くか……」

「そんな事は分かってるわよ！ 相手をチラッと見ただけで、その後どう動くのか分かるって言いたいのか!?」

「まあ、あれ位のCPUなら何とか……」

むしろ、キツチリ連携が取れていた分、予測しやすかった。

「でも、自分でも驚いてるんだよ。なんというか……。何時もよりストライクの調子が良かったような気がして」

「あ、それは私がOSを弄っておいたからよ」

「そうなの？ 何となくレスポンスが速い気がしたんだよね……。あれがなかったらヤバかったよ、実際。ありがとう」

「あう、ど、どういたしまして……」

素直に感謝の意を述べると、アイシアは急に大人しくなった。あれでもまだ、何となくかぁ。と俯いて呟いている。

「ねえ、何かスポーツとかしてたの？」

「なんだ、藪から棒に？」

新型機のOS用のデータ収集じゃなかったっけ？

「あんたの動きが凄いのは、何か理由があるんじゃないかと思ったのよ！ 他意は無いわ！」

「？ 昔、野球してたな」

「上手いの？」

「そうでも無かったな。実は予測って野球技術の延長なんだけど、体はそんなに強くないから、宝の持ち腐れって奴だな」

もつとも、肉体的に負けてたから、予測みたいな小手先の技を身につける必要があったんだが。

「ちなみにVRだと体は意識と直結して、思ったとおりに動いてくれるから、存分に動けるな」

「ふーん。昔してたって事は止めたの？ 理由は？」

「チームに馴染めなくて……。これ、完全に世間話じゃね？」

「そうね」

開き直るなよ！

「でも、いい話が聞けたわ。OSの方針も決まったし」

「今の話でか？ 激しく不安なんだが」

「じゃあ、今のうちに不安を味わっておくのね。吹き飛ばしてあげるから」

意味わかんねえよ。

~~~~~

「ん、メールだ」

珍しいことに、着信名は姫乃。時刻は12時を周り、ログアウトした俺はもう寝る以外にすることはない。

『件名：一日一問一答』

好きな食べ物は？』

「なんだこれ？」

メルアドは交換したが、意味も無くメールを送らないのは、俺も姫乃も同じで、珍しいメールは唐突で意味が分からなかった。

「ん……。カレー、かな？」

取り敢えず返事を返し、明日意味を問う事にして、ベットに潜り込んだ。その夜の間に返信はこなかった。

## 第15話『可能性』（後書き）

最後のメールは主人公をもっと良く知って貰うために作ったコーナーです。

ヒロインとの仲を強める意味もありますが、要はオマケコーナー。継続していくかは未定。

あの2人に対する質問があれば感想で呟いてください。メールの内容に反映されると思います。あくまでオマケですけど。

次回予告。

GWは地獄のような日々だった。

毎日MSに乗り続け、己と機体の限界に挑む日々。

その結果は休み明けに持ち越された。

次回『NEW』

次回予告をすると話が作り辛くなると気づいた今日この頃。それでも第2章の間くらいは続けます。

お楽しみに！

第16話『NEW』（前書き）

うーん、キャラ不足。どこから持ってきてみよう。

## 第16話『NEW』

5月初めの大型連休は瞬く間に過ぎていった。

詳しい内容にしても、同じことを繰り返す日々だったとしか言いようがない。MSに乗って、OSの調整をして、MSに乗って、機体のバランスを弄って、MSに乗っての繰り返しだ。任務受けまくったので軍資金も貯まっている。

そのおかげで、どうにかストライクフリーダムが実践に足るところまで達した。問題は残っているのだけれど……。

「もう分かっていると思うが、今日集まって貰ったのは他でもない。GW中の成果を発表して貰う」

連休前に使ったのと同じ部屋をまた借りて、報告会を行なっている。メンバーも変わらず5人だ。

「まず、ローゼンとベルメール。部隊の専用艦の件は？」

「上々だ。昔馴染みに流してもらった。型は古いが悪くない」

「改修も完了済みだよ！ 武装は防衛重視で良かったんだよね？」

「よし、分かった。名前も決める必要があるな。後で話し合おう」

母艦か……。母艦があれば今までより自由が広がる。個室もある

し。

「次は……新型はどうだ」

「OSは完成しました。後はユーリ君次第です」

アイシアの言うとおり、後は俺が使いこなせるかどうか。まだ万全とは言えない。だが……

「機体は全く問題ありません。アイシアもベルも良くやってくれました。なにより……楽しいです」

「そいつは良かった。期待してるぞ」

「はい」

「試験は全員合格したし、後は……姫様、新型以外のOSはどうなってる？」

「これからです。1人1人に合わせるので時間が掛かります」

「OK。俺たちは後回しでいいから、部隊の底上げを頼む」

「分かりました」

これで隊員からの報告は全部だ。残すは隊長が新隊員を勧誘できたかどうか。

隊長は口を閉じ、ほかの面々は緊張を顔から滲ませる。ローゼンさんは何時も通りだが……。

「さて、新人の事なんだが……」

ゴクリ。喉が音を鳴らした。今回の中で最も難しかったのは新人探しだったはずだ。超ハードで有名なこのゲームを始める人はあまり多くないし、その中で続けて行ける人も少ない。少数精鋭を唱える隊長のお眼鏡に叶う人物はいたのだろうか……。

ニヤリ、隊長の顔が耐え切れず崩れた。

「新たに1人確保したー！！！」

オオー。人数の少ない歓声だが、狭い会議室では丁度良かった。

「それじゃあ紹介しよう。入っていいぞ」

「ハイッ！！！」

外から元気の良い、高い声が聞こえて来た。同時に扉が開く。

高い声？ その疑問が形になるより、その新人が姿を見せる方が早かった。

目に映るのは元気の良さが溢れるような、小柄な女性アバターだった。黒いショートヘアは少年の様に見えなくもないが、スカート履いた少年は居ないだろう。多分。

「MS二等兵のマイです！ よろしくお願いします！」

なんだか……ベルに似た雰囲気を持っている。俺にとってそれは、

災いを呼ぶ気配と同義だ。悪い予感が背筋をそつと撫でる。

「ユーリウスさんは、どなたですか？」

「へえ、俺！？」

悪い予感が行き成りの中したんじゃないだろうか？俺を完全にロックオンしたようで短い足を大幅に動かして、ズンズンと近づいてくる。狭い部屋なので、直ぐに目の前まで迫ってきた。

「ユーリウスさん！ボクを弟子にしてください！」

「は……ええ？弟子！？」

「ハイッ！！」

期待満点の子供のような目を向けられ、俺の頭は処理が追いつきそつに無かった。他のみんなも俺を助けてくれる様子はない。

どうしてこうなったのか。そんな心の叫びは誰にも届くことはなかった。

~~~~~

『Re..Re..一日一問一答』

ふーん。カレーの種類は？』

『Re：Re：Re：一日一問一答

チキンだな

逆にお前の好きな食べ物は何なんだよ』

第16話『NEW』（後書き）

さて、後輩の機体はなんにしましょか……。

突撃するイメージがある……可変機の出番かな？

次回予告。

突然弟子入り宣言をしたマイ。その理由は一体？

ユーリはその期待に答えられるのか。

アレ？ なにこの主人公ハーレム。こんな予定では無かった筈……。

次回『弟子』

お楽しみに！

第17話『弟子』（前書き）

もうちよつと意外性が欲しい今日この頃。

第17話『弟子』

マイは想像以上に元気に溢れていた。それに、明るい性格で誰とでも直ぐに仲良くなれるようだ。

俺は、その強引とすら言える押し強さに困っている。最も、彼女が強く俺に押しかけてくるのは、弟子入りしたいと言う願いによるもので、他の人にはそこまで強く迫ったりしていない。だから、部隊内での評価は概ね良好だ。

なぜ俺にこだわることか聞いてみた所……。

「見たんです、動画！」

「動画？」

「ああ、これのこと？」

そう言ってアイシアが見せてくれたのは、先日の小隊長試験の映像だった。何故かとある動画投稿サイトにアップされている様で、画面上には「スゲエエエ！」とか「キモイwww」とかの文字が踊っていた。すでにかかなりの再生回数だ。

「なんでうpされてんの？」

「凄かったから上げてみた」

アイシアもここまで反響があるとは思わなかったらしい。

「これを見て思ったんです。私この人の弟子になりたいって」

なんでも、昔から『無限の戦場』をやりたかったが、超ハードで有名だったので、踏ん切りがつかなかったんだそうだ。

○ikiを見たり動画を見たりと、ずっと憧れて情報収集していたらしいので、俺より知識がありそうだ。俺はだいぶ知識に偏りがあるからな。

「師匠の事も調べました！ デブリ帯のタイムアタックで2位の記録も持つてて凄いです！！」

あれはストライクフリーダムを使用する条件として部隊内で決めた任務だ。ノーミス、55秒以内に入ればOKと言う条件だった。1位はタイムアタック系の任務に取り付かれたスピードホリックで、機体もそれ専用に着せいであって、正直ストライクじゃ勝てる気がしなかった。

それより、まだ弟子にした覚えはないんだが……。

「もう諦めたら？」

「けど、俺に弟子なんて早すぎるよ。ねえ、ローガンさん」

「……何事も経験だと思っが？」

「そうですね師匠。師匠になら出来ますって、師匠」

だからまだ師匠じゃないし、絶対日本語おかしいだろ。

「ユーリが無理というなら俺が手取り足取り……」

「嫌です。師匠がいいんです!」

orzとなつている隊長。マイのことは将来有望と言っていたが、やっぱり下心があつたんじゃないだろうか？ それに隊長はロリもイけるなんて、いよいよ見境が無くなつてきている。

先輩2人を頼りにできない以上、もう逃げ道は無い。

「……………」

「……」

純粹無垢な期待と、若干の不安を含んだ目は潤み始めていて、「捨てないで」と言うチワワ的な雰囲気醸し出していた。

「はあ、分かったよ。君は今日から俺の弟子な。ただし、先輩達の言うことはちゃんと聞けよ?」

「ハイッ! よろしくお願ひします!!」

こうして俺は、初めて弟子を持つこととなつた。出会つてから1時間も経っていないが、既に好感度はMAXと言う状況に、戸惑いを隠せない。

困つた様子の俺を見て楽しそうな仲間の顔が、俺の気分を更に憂鬱とさせた。

))

『Re:Re:Re:Re:一日一問一答』

そうねえ。強いて言うならパスタ系かな？

『スパ王が特に好きよ』

『Re:Re:Re:Re:Re:Re:一日一問一答』

意外過ぎる回答だった

もしかしてインスタント生活？』

『Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:一日一問一答』

う……

た、偶に食べるのが美味しいのよ!』

第17話『弟子』（後書き）

その他新メンバー募集中。by ジュン・クリムゾン

次回予告。

元気一杯、全力全開、歩く太陽、新隊員のマイ。
彼女の力はどの程度のものか。

「私、体験版はやり込んでましたから」

次回『新人研修』

お楽しみに！

第18話『新人研修』（前書き）

ちょっと忙しくなってきました。

第18話 『新人研修』

「新人に対しては厳しめの任務だけど、落ち着いてやれば大丈夫だから」

『ハイッ、頑張ります！』

「うん、落ち着け」

俺とマイはそれぞれの機体に乗し、任務に出てきていた。性能の劣り、まだ動きの鈍いマイの機体に合わせ、大地を蹴りながら前進していた。

今回は取り敢えず、実力の程を見る為の任務だ。他のメンツはそれぞれ別の仕事がある。なんでも、後2人は新人を捕まえるつもりらしい。

任務内容は敵機6機の撃退。2個小隊相当だ。2対6は少し荷が重いかと思っただが、俺自身の隊長訓練も含んでいるので、簡単すぎても意味がない。

勿論機体は新型のストライクフリーダム。早く慣れないと実践に出れないので訓練を疎かにする訳にもいかない。

俺がストフリに乗ると知ったマイは「さすが師匠です！」と更に目を輝かせた。ドラグーン搭載機の不人気は知っていたようで、つきり俺が使いこなせると思っているようだ。

ここまで全幅の信頼を受けてしまっただけは、それを裏切れなくなる

のが男の性と言うもので……。だが、比例するように責任感も感じ
てしまう。

うん、俺は俺に出来ることをやろう。出来ないことは素直に認め
て出来る人に頼る。これが上手くいく秘訣だと、俺は思う。勿論、
人に頼るのは自分で努力した後だ。頼るだけの駄目人間になつては
いけない。

「今回は自由に動いていいぞ。フォローするから」

『了解です!』

新人にいきなり連携を期待しても酷なので、今回は実力を見るた
め自由に動かせる。俺はフォローするのにも慣れておく必要がある。

マイが乗る機体は初心者らしく「RGM-79 ジム」だ。まだ
自分用の機体を選ぶ前の段階のだが、そのまま使うのは余りにス
ペック不足の機体の為、予備パーツをかき集めて強化、OS面の大
幅な改修を経て、数段階強化されている。

一応「ジムS」と言う名前を付けておいた。性能的には「ジム?」
すら越えそうな勢いだ。

さらに、最初の頃に余計な癖を付けない様に、バランスのとれた
機体に仕上げられている。ウチの小隊のメカニックとエンジニアは
非常に優秀です。

やがて、ピーピーピーとセンサーが鳴り、敵の接近を知らせる。

「いいか、落ち着けよ？」

『ハイッ！』

若干当てにならない返事を聞き、一層に気を引き締める。もつす
でに敵は目前まで迫っていた。

簡単な任務なので、敵機のランクもそれなり。どうやら名機『ザ
ク』の様だ。特に目立った装備もない。

『当たたれー！』

マイがビームライフルを乱射する。勿論、まだ距離もあるので当
たることはない。6機のMSは左右に分かれるようにして回避する。

「よっ」

その一番右端の機体にドラグーンによる射撃が入る。その機体は
アッサリとその鉄の体を四散させた。流石に6機のまま混戦に入れ
ば援護も難しくなるので、距離のある内に減らしておきたい。

『師匠スゴイです！』

「いいから敵を見てろよ、っと」

編隊の崩れた方をもう1機落として残り4機。これなら大丈夫だ
ろっ。

「ほら、応戦しろよ」

『ハイッ!』

マイは元気よく返事をすると、スラスターを吹かして前に出る。そうすれば当然、マシンガンを撃たれる。

「正面から突っ込んで、的になるだけだぞ、左右にも動け!」

宇宙だと上下も加わるし、区別も曖昧だから数段難しくなる……
のは今は関係のない話。

『ハイッ!』

元気だけは良い。だが、同じことしか言っていない。やはり余裕はないのだろう。

マイは言われた通りサイドステップを織り交ぜながら敵に接近を試みる。その間に唯一バズーカを装備していた1機を落として、残り3機。ちよつとやりすぎた気もする。

ある程度接近できればビームライフルは当たる。相手は初級CPUだし、OSも優秀だから当たって当然とも言える。

そうする内に残りは2機。終わるのも時間の問題かと思われたが、逆に数が少なくなったことで、フットワークの良さが出てきてビームが当たらない。

マシンガンの弾が少しずつジムを削り、徐々に流れが変わりつつあった。

『なんで……当たらないのっ!』

焦りが操作ミスを呼び、操作ミスが焦りを呼ぶ。典型的な悪循環に陥っている。このままだと落ちるのも時間の問題だろう。

「落ち着け。落ち着いて盾を構えろ。相手の動きを良く見るんだ」

この一言で動きが変わらなければ、落とされる前に相手を落とすてしまうことにして、アドバイスを送る。

ただ、言っていることは何の変哲もない事だ。だが、これが出来なきゃその先には進めないだろう。

『ハア、ハア』

マイの息遣いが聞こえる。

どうやらアドバイスを聞く、冷静さは残っていたらしい。それだけでも今後の成長に期待できる要素の1つだ。

それまでのような派手な動きを止め、盾を構えて亀の様になって敵を睨むジム。マイの姿が見える訳ではないが、勝つ意思が感じられる。

『ッ、そこ!』

不意に放ったライフルがザクを貫く。相手が動こなくなった所を狙う完璧なタイミングに思わず感心した。

その後、俺の指示で接近戦を挑んだマイが、最後のザクを落とす

第18話『新人研修』（後書き）

戦闘描写が軽すぎると思う……。でも生身の戦いじゃないからなあ。

次回予告。

初めて部下を伴った任務は無事終了した。簡単すぎただけけど……。

次はもっとチャレンジした内容にしよう！

次回『ドラグーンの評価』

お楽しみに！

第19話『ドラゲーンの評価』（前書き）

現行の章展開について考えるの忘れていた。
ちよつと先のことばかり考えすぎてました……。反省。

第19話『ドラゲーンの評価』

マイと初めての訓練を終え、新しく……と言うか初めて導入された母艦でブリーフィングを行っていた。でブリーフィングと言っても、飲み物を飲みながら任務での話をして休憩するだけだが。

「それにしても、始めたばかりの素人じゃ無かったのか？ 普通に戦えてたじゃないか」

「えへへ。私、体験版はやり込んでましたから」

体験版って確か、MSを動かしてみよう！ のレベルまでしか遊べなかった気がするんだが、あれをやり込むって……。

「基礎は出来てるみたいだな。じゃあ、今日のミッションは簡単すぎたか」

「いえいえ、師匠が凄かっただけじゃないですか。相手は全部ドラゲーンで倒してて、ビームライフルすら使わないなんて！」

「良く見てたな。でも、それは別に凄いことじゃ無いんだ」

「へ、どうしてですか？」

「簡単に言うとビームライフルを『使わなかった』んじゃないって、『使えなかった』からだ」

「？」

不思議そうな表情をするマイには俺の言いたいことが伝わっていないようだ。

「えーと、オールレンジ兵器が使われない理由は知ってるな？」

「ハイ。使いこなせる人がいないからです」

「俺もまだ使いこなせてないんだ」

「ええー！ー！」

「具体的に言うと理由は3つある。まずはOS。初期で搭載されているOSはCPUや初心者相手ならともかく、ベテランには通用しない。使い物にならないと言われている。これを改良出来る人は殆んどいないだろうし、いたとしても需要のないOS開発は正直無意味だ」

「なんで需要がないんです？ 開発に成功すれば欲しい人はいくらでもいるんじゃないですか？」

「そんな簡単じゃ無いんだ。2つ目の理由に思念操作がある。ほかのゲームではベテランにとって必須になる技能だが、このゲームには当てはまらない」

「どうしてですか？」

「俺たちが操作するのはMSだから、そもそも思念操作なんて必要ない。けど、オールレンジ兵器の操作は思念操作するしかない」

「でも、ベテランなら思念操作は出来るんでしょう？」

「普通のゲームならな。だが、俺らが操らないといけないのは鉄の塊なんだ。飛ばすことだけなら割と誰でも出来る。だから初期OSも一般向け仕様で半オート、ベテランには当たらない。例えOSを作っても、まともに扱える人がいないんじゃない。試験が出来なきゃ改良も出来ない」

「じゃあ、師匠は思念操作できるし、OSも完成してるんですね」

「そうだけど、まだ思念操作は訓練中だ。MSとドラグーンを両方同時に動かせる様にならないと実戦では使えないよ」

今はまだ片方で精一杯なんだ。出来て、前進しながらドラグーンを飛ばすぐらい。

「離れたところからドラグーンだけ飛ばしたり……？」

「戦場で足を止めたら即、落とされるよ。プレイヤーはCPUとは違うんだ」

要、教育だな。

「後、今の俺には200m位先までしかドラグーンを飛ばせない。これが最後の理由になるんだが……空間認識能力だ」

「クーかんにしきのーりよく？」

次から次へと出てくる理由についてこれなくなってきたらしい。別にそこまで難しい話をしているつもりはないんだが。

「読んで字のごとく空間を認識する能力らしい。」

とはいえ、半オートの初期OSには必要のない能力だ。運営側はこのことまで考えて半オートの使えないOSを採用したのだろう。結果は残念に終わったが。

「ということは師匠にはその特殊能力があるんですね！」

「さあ、どうだろう？ アイシアは『あると思う。なかったら頑張っ
て身に付ける』って言うてたけど」

昔から目がいいのは自慢できるがそれとは違うのだろうか？ 本
当に成長してくればいいのだが。

「そうなんですかー。でも、師匠は師匠です！」

「いや、意味が分からないって」

あれ、説明無駄だった？

後日、しばらく任務に出て、取ってきたデータを持ってアイシア
のもとに来た。

「で、結局俺に空間認識能力ってあるの？」

「うーん。ある、とは思っただけど、私にとっては畑違いな分野だ

もの」

「アジアの評価は前と変わらず。基本真面目なやつだから前提があやふやな事は言いたくないんだろう。」

「実際に結果は出てるんでしょ？ だったらあるんじゃない」

確かに詳しく調べて訓練した甲斐もあって、2機までならMSとの同時制御にも成功した。心無しか稼働領域も伸びて来ている気がする。

「ほら、客観的評価って大事だと思うんだけど」

「まあ、考えといてあげる」

データと睨めっこするアジアは心無しか冷たい。

……邪魔するのも悪いから黙ってしよう。

「それで、この子の改造案は出てきたの？」

黙っていると、今度は逆に質問された。技術部としてはやっぱりそつちが気になる様だ。

「特には。万能機だから難しいよ。下手に武装追加するのも不味いし、だからと言って外す武装も特にない。本当バランスいいよこの機体は」

ドラグーンさえ使いこなせればね。

「若干低めの火力は手数と正確さで補うとして、後は防御面？ でも高機動が売りでしょう？ 装甲追加は悪手よね」

「逆に装甲削って機動力強化とか」

「本気で言ってる？ 更にピーキーな機体にするの？」

「元々コスト高い機体だから攻撃に当たらない事が前提だし、仮想のGじゃ人は死なないよ」

「うーん。実戦で様子を見てから決めましょう。それから、名前考えてくれない？」

「名前？」

「この子のよ。ストライクフリーダムって長いし、ストフリって略語もイマイチ気に入らなくて」

「直訳したら『攻撃する自由』って感じだよな」

「ずっとこの子って呼んでる理由はそれなのか？」

「まあ、考えとくよ」

「うん。決めたら、その名前にあったパーソナルカラーに変えましょう。何時までもそのままなのは味気ないわ」

「あー……任せる」

本当にMSの事となると饒舌になるな。

俺はそんな事を考えながら、押し強いアイシアに全てを任せる
のだった。

~~~~~

『Re111：一日一問一答』

デートをしましょ」

「……………え？」

第19話『ドラゲーンの評価』（後書き）

好きなんです……、西尾維新。

次回予告。

デートをします。

次回『デート！』？

………あれ！？ どうしてこうなった？

第20話『デート!?!』(前書き)

内容が内容だけに上手く書けた自信がありません。

## 第20話『デート!?!』

6月。まだ梅雨に入る前で、ジメジメとした嫌な空気はなく、頭上には青い空が広がっている。

俺は定番の待ち合わせ場所、駅前で姫乃を待っていた。

デートである。

『ユーリウス』が『アイシア』に誘われた仮想のデートではなく、『美空悠人』が『姫乃愛沙』に誘われた現実リアルのデート。

正直どうしていいのか分からなかった。

基本ゲーム以外することのない俺は年中暇人だ。『無限の戦場』がアップデートでメンテナンス中となれば本当にすることもなく、断る理由も持っていなかった。

鈴香に着いてきて欲しいと頼んだら怒られた。

今回のアップデートで遂にソレスタルビーイングによる武力介入イベントが実装するらしく、テイエリア好きの鈴香はこの日を待ちわびていた。今もメンテ終了を待っているのだろうか？

ちなみに武力介入イベントは通常任務の最中にソレスタルビーイングが突如乱入してくると言う、そのまんまな内容だ。『SEED DESTINY』の他にも『ストライクフリーダム』や『インフィニットジャスティス』、『アークエンジェル』と『エターナル』が乱入してきた。反則的な強さで、大規模戦闘の時は『ミィティア』

まで出てきたらしい。

結局俺は指示された通り、1人姫乃が来るのを待っていた。

「ゴメン。待った？」

後ろからかけられた定型文にどのように返事するべきか思考し、振り返る。この間、約2秒。

『いいや、俺も今来たところ』

『それなりに待ったよ』

が、振り返った俺は言葉を失ったように口をポカンと開けた。要は驚いたって事なただけ…………。

「どうしたの、鯉みたいな顔をして」

それまで親しかった訳でもない姫乃の私服を見る機会などあるはずも無く、今日初めてそれを見た。

と言いつつ、俺は服なんて見ちゃいなかった。そもそも流行なんて知るわけもなく、女物の服の知識なんて欠片も持ち合わせていないのだから。

つまり、服が似合っているとかそういうことじゃなくて、とにかく姫乃の雰囲気というか…………。アレ？

「本当にどうしちゃったの？ ラグった？」

「あ、いや。姫乃が可愛いからつい……」

「……普段は可愛くないとも言いたいの？」

「ちがつ……、私服の姫乃はいつも以上に……」

ハッ！ 俺は何を口走っているんだ！？ ひ、姫乃がニヤニヤしている！

「いつも以上に？」

「い、いつも以上に……オジョウサマっぽいなって」

露骨に視線をそらしながら言う。俺には高すぎるハードルだ。

「む。いつか言わせる。ほら、行こ！」

そう言っただけ俺の手を掴んで歩きだした姫乃の服装は、イメージ通りのお姫様風な服ではなく、今どきのカジュアルで女の子らしい服だったことを付け加えておく。

今日の予定は急遽変更となり、ウィンドウショッピングになったらしい。そもそもどういった予定だったのかも聞いてはいないけれど。

お昼にファーストフードに入った事を除いて、ずっと歩きっぱなしで、服屋を見て回った。

VR技術の発達で、試着まで家でできるようになったので、現実でお店を回る必要は激減し、お客は男女のカップル位だった。かく言う俺たちも、周りからはそう見えているのかもしれない。

「どう『可愛い』？」

「うん、よく似合ってるよ」

一部強調した言い方への返答もだんだん慣れてきた。同時に疲れも溜まっているけど。

もう何時間もお店を回っているが、気にいる物は見つからないらしい。それともどうしても俺に『可愛い』と言わせたいのだろうか？

姫乃は綺麗で、どんな服でも着こなせると言っても過言ではないだろう。合わないのであれば、それは服が悪いと言ってもおかしくはないと思う。ただ、普段のイメージと、姫乃の好みの服から『可愛い』と言つのは難しいところがある。

極端な話、試着した数多の服よりも、今朝着てきた服が一番『可愛い』。あれは姫乃の好みでコーディネートした服じゃないのだろうか？

）

「あ、メール」

歩き疲れた俺は姫乃に構っていられる程の元気は無く、どこか座れる場所はないかと辺りを見回していた。

ガッ！

「次のお店に行くわよ」

「まだ回るのか、もう7時前だぞ？」

「大丈夫、次で最後にするから」

結局、掴まれた腕を振り払う事は出来ずに姫乃に着いていくしかなかった。もはや諦めの気持ちが強かった。

最後、と言われて来たお店は今までと若干趣が違っていた。男の俺にとって居心地の良くないことは変わりなかったけど。

「ちょっと待っててね」

姫乃はそれだけ言って店員に話しかけに行った。少しだけ解放された気分。

近くに椅子を見つけた俺は腰をおろし、使いすぎた足の筋肉をマッサージする。オヤジくさいかと思うけど、基本運動不足の俺なので仕方ない。多少の危機感を覚える。

10分と少し待っていると姫乃は戻ってきた。服が違う。試着しているのだろう。

「『可愛い』？」

「……………うん」

「『か・わ・い・い』?」

「……………ああ、可愛い」

それは、もうこのやり取りに疲れたからとかではなく、純粹な感想だった。

やはり、今まで回って来たお店とは種類(?)の違うお店のようで、今日最初に着てきた服と同じ系統の様に見えた。

「店員さん。この服まとめて頂戴」

「はい、かしこまりました。良かったですね、気に入ってもらえて」

「ええ、ありがとうございます」

そう言っただけ姫乃は、なかなかの金額の買い物もポンと済ませた。もちろん荷物は俺が持つ事になった。

「晩ご飯はファミレスでいいかしら?」

「え、晩ご飯も食べるのか?」

「あ、お金無いなら出すわよ?」

「い、いや。自分の分くらい自分で出すよ」

さらりとそんなことを言われては断るに断れなくなった。お嬢様っぽいとは思っていたけど、本当にお嬢様なんだな……。でもファミレス？ そんなもんなのか。

「それで、名前決めた？」

「名前ってMSの奴か？」

「そう、あの子の名前」

「んー。一応候補はリバティー」

「リバティーLiberty……。自由を求めるって意味よね」

「ああ、フリーダムは『自由を享受する』って意味合いだからな。どっちかというトリバティーの方が好きだし」

「ふーん。後、今日は黒っぽい服装だけどいつもそんな感じなの？」

「いつもって訳じゃないけど割と多いかな」

「黒ばっかりって、あんまりオシャレじゃ無いらしいよ」

「別にオシャレとか……」

あんまり気にしてない……。

……ハッ！ 遠回しな仕返しか！

……今後ちよつとは気を使おう。

~~~~~  
……

『Re：Re：Re：Re：Re：教えて！』

秋原さんの教えてくれたお店で

店員さんにお任せしたら一発だった！

やっぱり良く知ってるんだね、美空君の事』

『Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：教えて！』

まあ幼馴染だからね

今度は私ともお買い物行こうね

メンテまだ終わらないよ（T・T）』

第20話『デート!?!』(後書き)

更新速度は出来るだけ落とさないように気を付けたいです。

……わざわざ言っているのは、そうなる可能性があるからなんです。

今月の電撃文庫の新刊(11/10発売)でチェックしてるのは
はへビーオブジェクト位なので大丈夫だと信じたいです。

次回予告。

初めて師匠になったのだが、その弟子は非常に優秀。

しかも新型機の扱いに困っている俺に余り余裕はなかった。

師匠としてどうあるべきか隊長に聞いてみたら……。

次回『師匠の弟子入り』

矛盾してない!?!?

第21話『師匠の弟子入り』（前書き）

「ちょっと順序が逆だったかもしねませんねー。」

第21話 『師匠の弟子入り』

「よお、頑張ってるか？」

休憩していたところに声をかけてきたのは、最近ご無沙汰の隊長、ジユンさんだ。

「なんだか久しぶりに隊長のことを見た気がします。」

「俺もお前を久しぶりに見たよ。頑張ってるみたいだな」

「まあ、頑張ってはいるんですが……」

ストライクフリーダムの操縦訓練と弟子^{マイ}への指導。マイは優秀なので余り手もかからないが、ドラグーン^{マイ}の操作については手間取っていた。3機以上の制御に苦しんでいる。

最も、1番の悩みはそっちではなく……

「師匠ってどうやればいいのか分かんないです」

「マイちゃんはどんどん上手くなってるんだろ？」

「はい、正直俺が居る意味があるのか分からなくなるくらいに」

そうなのだ。マイは非常に優秀で、俺という師匠の存在意義を見いだせないでいる。本当にどうしたらいいんだか……。

「なるほどねえ……。大体分かった」

「へ？」

「流石にいきなり押し付けてのは悪かったな。お前は今日からしばらく師匠休みな」

「はい？」

「ちよつと修行してきな。師匠として胸張れるようにさ」

「ええ？」

隊長はいつも通り強引だ。でも頼れる雰囲気があつて……。要は断れないって事だけだな。

隊長に言われてやってきたのはプライベートホームの1つだった。

一部のトッププレイヤーにでもならなければ手にれるのが（金銭的に）難しいプライベートホーム。普段は艦船の個室があるから、本当に見栄以外のなんでも無い代物だ。

そんな家を見て俺は絶句した。

なんと言つか……。古いドラマで見るような日本の豪邸だった。

どう見ても雰囲気にもマッチしないインターフォンを押すと、老人の音が聞こえてきた。

『お主がジュンの言っておった者か？』

「は、はい。ジュンさんに言われて来ました。」

『……入れ』

その声と共に重々しい木の門が開き、中からNPCが出てきた。

「ご案内いたします。こちらへどうぞ」

……一体どんな人なんだろう？

「若者よ、よくぞこられた」

案内された先は庭に建てられた道場。（こんな事まで出来るのか……スタッフ頑張りすぎ）待っていたのは声の通り老人のアバターだった。

老人、顔の皺は深く髪も髭も威厳たつぷりに白い。しかし、見た瞬間からなにやらエネルギーの様なものすら感じる。「これが『気』か……」流石に冗談だな。

「ジュンの奴から何か聞いてきたか？」

「い、いえ。行けば分かるとしか」

「わっはっは。あやつも大分変わった様じゃな」

「そうなんですか？」

「ああ、昔のあいつは今のお前さんにそっくりじゃったわい」

「ええ!？」

あの自意識過剰とすら言えるジュンさんが!？ 嘘だ!

「まあ、そんなことはどうでもいいんじゃ。それでお前さんはどうしたい？」

「どうしたいって……」

「成長したくて、何らかの教えを請いたくて、今の自分から変わりとくて、悩んでおるのだらう?。ここはそう言う者が来る場所じゃ」

「あ……」

だからジュンさんはここに行けと言ったのか。かつて自分を変えてくれた場所に。

「もう1度聞けど。お前さんはどうしたい？」

「上手くなりたいです。自分の機体を自由自在に操って、自分の弟子に胸を張れるように」

「なんじゃ、もう弟子がおるのか?」

「ええ、なりゆきで……」

「じゃあ、のんびりしておる時間はないのぉ。特別コースでいくぞ
」！」

「はいつー！」

そして俺の修行（特別コース）が始ま……

「おっと自己紹介がまだじゃったの」

「俺、いや、自分はユーリウスって言います。ユーリって呼んでく
ださい」

「うむ。儂のことは……」

~~~~~

『Re19：一日一問一答』

学校でもぐったりしてたけど

大丈夫？』

『Re20：一日一問一答』

……大丈夫（多分）

ちよつとつけてるだけ』

「……文字の打ち間違えかしら？  
だとしたら相当疲れてそうだけ  
ど」

第21話『師匠の弟子入り』（後書き）

次回予告。

老人の正体は超古参のベテランプレイヤー！

その修行は精神を極限まで追い込むようなスパルタ仕様！  
スペシャルな特訓のその先に待つものとは！

次回『修行！』

お楽しみに！！

第22話『修行!』（前書き）

戦う描写少なすぎますよね。

次には……いや、次の次はちゃんと戦います!

## 第22話『修行!』

拳聖ジーク。老人はかつてそう呼ばれたという。

その名の通り、こと近接格闘で彼に並ぶものはないと謳われた古参プレイヤーの1人だ。

現実でもその老齡なアバター通りにご高齡らしく、今では戦場に姿を表すことは少なく、後進の育成に力を注いでいるのだとか。

俺が指導を受けた3日間はダイジェストでお送りする。ひたすらシミュレーションマシンで戦い続けた様子を細々表す必要はないだろう？

ちなみに、シミュレーションマシンでは機体の損傷等で発生する修理費用が掛からないため、訓練に使用される。1部では「本物の戦いの緊張感が足りなくなる。強さとは実戦によって磨かれるのだ」とか言う人もいる。マイの訓練にも程々に使用している。

「遠距離武装の使用は禁止とする！ 儂に付いてこれるようになれ！」

そう言うルールで行われた模擬戦。ジークさんが操るのはMFのモビルファイターマスターガンダム。MFは特殊な操作方法の為、素人では簡単に扱える様なものではないと聞いたことがある。

後で聞いた話だが、MFは直感的な操作が出来るので通常のMSよりは扱いやすいという。その代わり、本人の格闘センスが問われ、他の機体との操作性の互換が無いため、MFを極めるのかMSに乗るのかはどちらかしか選べないそうだ。

MFであるマスターガンダムはバリバリの近接格闘機。しかも、半引退しているとは思えないような操縦技術だった。

対するこちらは近・中距離戦用、高機動万能機。万能機とはいえ、紙装甲で武装の9割が銃器であるストライクフリーダムは明らかに格闘戦を得意としていない。

最初の方は秒殺。

慣れてきても機体の差が大きくなって、長くは持たない。(これは言い訳か)

普通なら作戦タイム 戦闘 反省 作戦(r)、とキチンと何が駄目で次にどうするべきか考えるところ。

しかし、そんな事は一切しなかった。

戦って、負けて、また戦う。

3日間(ちゃんと学校には行ってるし、睡眠もとってる)ひたすら戦い続けた。ジークさんは直接何かを教えてくれたりはしなかった。

『遅い！ もっと早く!!』

『もつと全体を見るのじゃ!!』

『甘い! 攻撃とはこうするのじゃ!!』

戦いの中で叫び続けるジークさんの血圧を心配出来るくらいの余裕がでて来て、ようやく分かってきた。この叫びがアドバイスだった。

俺は激しい戦いの中で頭を働かせる。勿論マスターガンダムと戦いながらだ。

思考を止めない、常に考え続けた。相手の動きを、自分の動きを、どうすれば勝つことが出来るのか。

考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、ふと気づいた。

勝ちたい!

その激しい衝動が、操縦と思考に分けられていた意識を貫いた。全ては勝ちたいと言う願いのもとに意識は統一されたのだ。

考えることが多すぎてオーバーヒートしそうだった脳が急速に冷えていく。今までボヤけていた視界が急にクリアーになっていくような感覚。

『む、変わったな……。だが、まだ勝たせてやる訳にはいかな!』

マスターガンダムが更に攻撃の手を強める。今までのでも手加減

していたのか……。

「それでも俺は……勝ちたい！」

熱いけど冷たい感情が胸の奥底より沸き上がる。ストライクフリ  
ーダムはその想いに答えるかのように動いた。

俺はそれまで、マスターガンダムの得意な間合いでは戦わないよ  
うに、機動力を活かしたヒット&ウェイ戦法を止め、同じ近距離で  
ビームサーベルを振るった。

お互いに紙一重の攻防が続き、時折掠めた攻撃が装甲を抉る。

「おおおおおおおおおッ！！！」

『ぬうううううううううんっ！！』

結果から言えば、俺はまた勝てなかった。

『わっはっはっは。まさか3日で追いつかれるとはの。俺ももう年  
かのう』

最後の攻撃はほぼ同時に相手の機体を貫いた。俺はジークさんと  
引き分けたのだ。

~~~~~

『緊急任務！』

今日あるらしい！

『姫乃さんはこれる？』

『Re：緊急任務！』

大丈夫、行けるよ

『美空君は？』

『Re：Re：緊急任務！』

『たいちよーが連絡してる！』

第22話『修行!』（後書き）

拳聖ジーク……。ぶっちゃけ適当です。

後、最後のは『SEED』に近い何かです。『SEED』では無いですが、似たようなものではありませんね。いつそ『SEED』と呼んだほうが楽そうです。

次回予告。

修行により、少し成長を遂げたユーリ。

彼のために拳聖が送る言葉……。

そして始まる緊急任務!
エクストラ・ミッション

次回『師』

お楽しみに!

第23話『師』（前書き）

ちょっと突発的かもしれませんが、早く話を進めたいんです。

第23話『師』

俺のもとに、隊長からその知らせが届いたのは、ジークさんと引き分けた直後のことだった。

『緊急』

緊急任務が出たぞ！

今すぐ来れるか？』

緊急任務とは、突発的に始まって直ぐに終わる、遭遇できればラッキーなイベントだ。大抵、クリアしたときに限定アイテムなどが手に入る事がある。

「ジークさん。俺、行ってもいいですか？」

最後に1度善戦したとはいえ、まだまだ教わることは多い筈。そうは思うが、この機会を逃すのも勿体ない。

「ああ、行け。もう儂から教えることもない」

「え、まだ何も教わってませんよ」

「うむ、免許皆伝はやれんがお前さんまらもう大丈夫じゃ。後は戦いの中で成長してゆくだろう」

「ありがとうございます！」

「僕もこれが楽しみでやつとるんじゃ。それと最後に1つ、師匠とはどうあるべきかについてじゃ」

そう言えば、そのことを忘れていた。自分の事だけで手一杯だったからな。

「くれぐれも僕の真似はするなよ？ 人それぞれにやり方があって、人それぞれに教え方も違う。『正解』なんてものはないのじゃ」

たった3日間。短い時間ではあったが、その分密度も濃かった。上下関係を力量の差としてハッキリと示されたからか、言葉を素直に受け取ることができた。

「ただ、絶対に弟子の前で弱い姿を見せることだけはしてはいけない。常に弟子の前に立っていなければ師匠失格じゃ。弟子が尊敬し、信頼する目標として有り続ける。良い師とはそのようなものだ。そして、いい弟子はその後ろ姿を追って育つのがじゃ」

「はい……」

『分かりました』そう答えたかったが、それは本当に分かったと言えるのか？ そんな疑問が脳裏をよぎった。俺はまだスタートラインに立ったばかりなのだから。

「それでいい。今はまだ……、いつか分かる時が来る」

100点では無い。いや、100点など存在しない回答だ。全てはこれから……。

「ありがとうございます。マスター我が師ジーク」

「さっさと行け。待っておるのだろうか?」

「……行ってきます」

急ではあつたが、俺の弟子生活は終わった。俺も弟子を預る身。何時までも弟子として居座っている訳には行かなかつたのだから、丁度良かったのかもしれない。

今はただ、目先の戦いに集中することにした。

「わお」

久しぶりに（今まではシミュレーション用のデータだったため）我が愛機と対面すると、思わず感嘆が漏れた。

アイシアに預けていた機体は改修、調整を終え、見事にカラーリングされていた。

白かった機体は濃紺に染まり、青かった部分も赤に変更されている、中々にグレた色である。登録名称も『ZGMF-X30AYリバティ』に変更されていた。

オマケのメッセージまで残されていた。

『機体の整備は万全。余りに遅いから名前と色まで変えちゃった。』

うっかり機体の限界ギリギリまで性能上げたりしたけど、修行してきたのなら乗りこなせるよね?』

……信頼されている証拠だと思いたい。

「ユーリウス、リバティ、出る!」

俺は既に発進した仲間を追って、宇宙へと飛び立つ。クリムゾン小隊の母艦は戦闘宙域の端に位置していた。

少し触っただけでも分かる。修業中ストライクフリーダムに乗っていて、徐々に感じ始めた機体反応の遅れを全く感じない。

「良い仕事するよ、本当に」

俺は遅れを取り戻すために、僚機の反応へ向けて、全速力で飛翔した。

第23話『師』（後書き）

補足。

ストライクフリーダムは元々、キラ・ヤマトの専用機だからこそ実現した超高性能機である。そのため『無限の戦場』では一般向けに性能は落とされている。（それでも扱える人は居なかった）
しかし、リバイターの性能は（アイシアの悪乗りで）元スペックに限りなく近い所まで近づいている。

もはや主人公最強物でしかない……。

4章からが本番（予定）なんだけどなあ。

第24話『火蓋』（前書き）

2章はこの辺までになりますね。

第24話 『火蓋』

戦火の合間をすり抜けて、仲間のもとへと急ぐ。僅かな遅れではあったが、既に戦場は混沌としていた。

『来たか、ユーリ!』

隊長からの通信が入る。随分と久しぶりに聞いた気がする。

「遅れてすいません!」

『俺に謝る必要はない。早くお前の部下の所に行つてやれ』小隊長』

『

「はい!」

『今日の編成はお前とアイシアにマイだ。しっかり弟子の面倒を見るんだぞ?』

「言われなくても分かってますよ」

幸い、尖兵として突入してきた部隊はCPUの物で、最初にCPUをぶつけて消耗したところを叩く、ちよつと嫌な定石の様だ。程なくして、僚機存在を確認した。

しかし、たった2機で多数の敵機を相手にしている為、防戦一方と言った様子だ。

「大丈夫だ……。行けるッ!!」

マルチロックオンシステムが数多の光点をモニターに映し出す。
標的は仲間を囲む敵機体

「当たれえええ!!」

ドラグーンの射撃が宙を焼く。刹那、目標としていた8機の内、
4機がその体を貫かれ爆散した。命中率50%。まだまだ甘い方だ
ろう。

『ユーリ君!』

『師匠!』

「すまない、遅くなった」

一気に半数近い数を失って、混乱する敵部隊を追い払う。まだ戦
いは続くのだから、執拗に全機落とそうとして消耗する必要はない。

俺の機体も様変わりしたが、それは他の2人も同じだった。

まず、アイシアの機体は俺が以前使っていた『ストライク』
だったものだ。と言うのも、そのカラーリングが、まるっきり『ス
トライクルージュ』の様になっていた。元は確かに『ストライク』
の筈なんだが……。『ルージュ』と呼ぶべきだろうか？ ちなみに
ストライカーパックを装備している。

それから、マイも流石にジムでは辛いと思ったのか、別の機体に

なっている。その背部にある特徴的なX型の大型稼働スラスタは、確か『クロスボーン・ガンダム』……

『そのクロスボーンの簡易生産型である『フリント』ね。その子にはまだ早いもの』

アイシアに言われてみれば、確かにガンダムの象徴とも言えるV字アンテナを持ったガンダムヘッドでは無い。

『その系統の機体はスラスタの扱いが特に難しくてジャジャ馬だつて言われるくらいなんだけど、マイにはピッタリみたいよ』

『ハイツ！ とつても気に入りました！』

「それは言ばしい事だと思っただけ……。俺に一言も無いって言うのは、なんか悔しいな」

それはまだ、俺が師匠らしくないって事で。

『あら、師匠は嫌だつたんじゃないの？』

「そんなことは無いさ。良く分からなかっただけで。さて、話ばかりしてる暇はないな、行くぞ！」

『了解！！』

『了解』

そう言つて、俺たちはスラスタを噴かした。戦闘はまだ始まつたばかりで、戦場はビームの光と爆炎の花が咲き乱れている。

不思議と不安は感じなかった。

第24話『火蓋』（後書き）

忙しくなったので（というかレポートの提出期限が！？）定期更新が滞る場合があります。ご了承ください。

また、次回からは3章になる予定です。

少しづつ1話の長さを伸ばしていこうと思っているので、更新再開してもペースは落ちると思います。

次回予告。

仲間たちは新たな力を持ってここに集う。

クリムゾン小隊は一步前進して中隊へ。

大規模な戦場に現れる、ネームドCPU！

次回、三章・クリムゾン中隊『武力の集う場所』

お楽しみに！

第25話『武力の集う場所』（前書き）

今回もそこまで長くはないです。

サブタイ詐欺？ あんまり関係なくなりました。

第25話 『武力の集う場所』

スラスターを甲高く震わせ、様々な色が飛び交う戦場を走り抜ける。最初から扱いやすかったリバティーだが、時間が経てば経つほどに俺に慣れてきている。俺が慣れてきているのではなく、機体の方が俺に慣れてきていると感じるのも不思議な話だが。

ここしばらくジークさんと戦い続けていた俺には、一般プレイヤーの動きは緩慢にしか見えなかった。ビームサーベル二刀流を携え、敵陣に切り込む俺のバーサークした様子に、アイシアはただ呆れていた。

まだ新人であるマイを連れていることと、隊長が作戦会議に参加していなかったことから、比較的戦線の端で安全な場所に配置されたいらしい。あまりの齒ごたえのなさに拍子抜けしてしまった。

結果、この辺を荒し回ってしまい、局地的ではあるけど優位な状況になったので、他の戦域に援軍　　と言えば聞こえは良いが、実際はただ自分が暴れたいだけ　　として移動していた。

『師匠速過ぎます……………』

『ちょっとやりすぎたかと思ってたのに、早速使いこなしてるし』

「あ、悪い」

余りに感情が昂って僚機存在をすっかり忘れそうになる。と言いかほとんど忘れていた。

「んー、俺先に行くから後から追ってきてくれ」

『な、ちよつと待ちなさいよ!』

「ゆっくりでも良いぞ。また後でな」

『ししよー!?!』

二人には悪いが、俺はのんびりしてられるほど気が長くない。この戦闘だっていつまで続くか分かったものではないのだ。

機体の限界に挑戦するかのようにその速度を上昇させていく。途中、俺と2人の間で大きめの爆発が起こって、2人の姿は見えなくなつた。お互いの位置はわかるのでその内追いつくだろう。

『その黒い機体待ちな!』

強そうな奴を見つけるため、手頃な的に闇討ちしながら高速で移動していると、不意に呼び止められた。

黒では無く濃紺なんだが……と言つつツッコミは入れず、通信の発信元を探す。幸い辺りは戦場の中でポツカリと穴のあいた様になつていて、発信源と思われるMSとその一派以外は見当たらなかった。逆に言えば、他にMSが居なかつたから自分が呼び止められたと気づけた。乱戦の中じゃ誰がどれか分からないからな。

『見慣れない機体だけどずいぶん派手にやってるみたいじゃないの』
俺を呼び止めた機体。それは『ドム』だった。

複数のシリーズで登場していた気がするので、詳しくは覚えていないが、重量級かつ特徴的な十字状のモノレールアイとその黒と紫のカラーリング。間違いない、ドムだ。それも3機。

「噂の黒い三連星か！」

『知ってるなら話は早いね！ 悪いけど三人がかりで倒させてもらうよ！ ジョージ、オルクス、ジェット・ストリーム・アタックだ』

『了解！』 『了解ッ！！』

黒い三連星。原作に登場するキャラクターをロールプレイする、いわゆる『なりきり』系のプレイヤーの集まりだ。

なりきり系のプレイヤーを決して侮ってはいけな。彼らのなりきりへのこだわりは、『ガンダム作品への愛と言う図式が成り立つ。つまり『無限の戦場』に置いて最も大切な因子^{ファクター}だけは偽らざる証として、その表層に現れていると言えるのだ。

当然、使える機体、戦術は限られたものとなり、一種の縛りプレイと言えるが、その限定されたものこそが自分にとって最強と信じ、鍛え上げてくるのがなりきり系の常だ。

つまり、あのドムは間違いなく、極限までカスタムされたドムなわけだ。そうなってくれば、機体の性能差など微々たるものだと言

える。

勝敗を分かつのはどちらがより機体を上手く操れるのか。相手はそのことに関しては疑うことも出来ないなりきり系。まず、間違いなくドムの動かし方というものが骨の髄まで染み込んでいるのだから。対する俺は、ロールアウトしてまだ時間が経っていない機体。

そもそも3体1。

それでも俺は

「……………上等お」

笑っていた。

第25話 『武力の集う場所』 (後書き)

次回は三連星攻略戦。本当はチームプレイが重要なんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4611x/>

ガンダム大戦VRMMO 『無限の戦場』

2011年11月20日19時46分発行